する時――十七留比。一緒に舞踏する事――百留比より二百留比。彼れ入浴後の汚水を飲む事――十七留比。

以上の中、マハーラージャと同座し、又は彼れと同室に密閉せらるゝ事に關しては、其に依り如何なる事の行はるゝか、將其請求者に就き予確實なる知識が無い。併し其威嚴を保たむ爲、マハーラージャが、門弟をして腕の長さ以上の場所に接近せしめざる事は、甚だ能く知られたる事實て有る。實際一方に於いて、印度國民の宗教に對する深き注意と、他方に於ける其實行とは、公平無偏頗なる研究者をして、次の如く斷定せしむるて有らう、卽ち一般に云はゝ國民としての印度人の道德的性質は、多くの宗教よりも遙かに優秀なるものて有る、此點に於いて彼豫言者等の巧みなる企圖は、失敗に終るものと云つて可い。

此所にパラヴ派の信仰形式は、Pushni Marga 又は滋養食物の路と稱せらる、而して此名稱は、排禁欲修行主義の信仰、及び精神の靈的進歩は、身體と身體の諸勢能を快き狀態に置く事に依りてのみ、可能なりてふ原理の主張に對して附與せられしものて有る。

第十一章　ベンゴールのチャイタニア派 (The Chaitanya)

目下各方面に擴張しつゝ有る、ベンゴール地方に於ける毘濕奴派の創立者チャイタニアは、此地方に於ける梵語研究地、及び曾て其首府たりしナデヤ(Nadiya)の高等階級ワイデカ婆羅門て有る。彼れは、基督紀元一千四百八十四年に生れ、其父ヂヤガンナートミスラは、元シルヘットの人にして、早く已に學生としてナデヤに來りたるものならむと察せらる。彼の家族は、娑摩吠陀を敎ふるを職とせり。其族姓はクリンにして甚だ高く、又頗る好當の花聟なりしかば、其地方長官たるナデヤのワイデカ婆羅門は、自己の娘サチを彼れに與へた。ヂャガンナートは、結婚後ナデヤの地に永住する事と爲りたるが、早く已に二男子を擧げ、長男をビシュワラップ、次男をニマイ又はビシュワバールと呼むだ。蓋し、次男は其後ベンゴールの有名なる毘濕奴派豫言者として、頗る能く知らるゝに至りしが、長子は早くより家を出て、カベリに於けるスリラム、ガム附近に於いて死したと云ふ事て有る。此所に

於いて、次男ニマイは暫時母の慰安て有つた。彼れは尙ほ若年にして、梵語學者の令聞有り、又彼れの讃嘆者に依りて、ナデヤの尼夜耶哲學の開祖なるラグナート、シロマニの競爭者たりしと傳へらるゝが、何れにしても彼が頗る敏捷なる學者たりしは、蓋し疑ひ無きものゝ如くて有る。併し、彼れが當時生存せし梵語學の大聖人に優り、或は此れと同等の位置に在りしと云ふ傳說に至りては、頗る怪む可く、又充分否定す可き根據が無いても無い。ナデヤに於ける成功に滿てる學生の抱負は、否野心は、自己の地方に於いて其修得せし特種學問の敎授たる事に在た、若し其れナデヤに於ける敎師たる事の機會を有せざる者に至りては、此地方に建設せる文法學校にも入らざるを殆と常習とした。されど、チャイタニヤの言行錄中には、彼れは第一の結婚後、直ちに家庭を棄て、暫時東ベンゴールの一地方に於いて、學校を設立計營せる事を記せども、其が果して成功せしや否やは何の臆說を危くするの必要も無く、從ひて唯彼れが二年前後の內に家に歸り、決して再び其地に歸來せざりし事實を記載すれば充分て有る。チャイタニヤが、ナデヤを去りて、東ベンゴール地方に行きし時は、僅かに二十歲の青年て有つた、併し一般年齡及び梵學者としての時期を知る事頗る困難て有る。偖ても彼れのナデヤの地に歸りしは、二十一歲の時にて在り、然も彼れは其時以來、自己の研究を放棄したりし故に、ラグナート及びラグーナンダンの競爭者たりしと云ふ說話に至りては、蓋し確實なりとして認むる能はず。卽ちナデヤに於ける最も正當にして、總明なる學生としては、三十歲以前に其學業を終る事出來ぬ、從ひてチャイタニヤは、法律又は哲學を修むるの企て無く、唯梵語文法の研究を爲せしのみて有らう。加之事實、彼れの傳記を見るに、梵語學者としての彼れの名聲は、唯僅かに其文法の知識に止まりたる事を述べて居る。

彼れが東ベンゴールに行きし留守中、第一の妻ラクスミイプリヤは、毒蛇に擊たれて死したりしかば、ビシュヌプリヤと稱する第二の妻を娶つた。チャイタニヤは、此時に至るまで託鉢僧として、我家庭を去るの考へを有せざりしが、三十三歲の時、伽耶城下に入り、亡父の靈に對し、敬虔なる印度敎徒の子孫後裔として、其負ふ所の本來の義務を遂行せむと決心した。此順禮は、實に其時ジャガンナート及びサチの子孫が、彼自身毘濕奴たるの觀念無き事を再び證明するものて有る、如何とな

らば、若し彼れにして其事を自覺したらむには、特に伽耶に行き、紇里濕那の足跡たるGadâdharを踏まむと欲するの理無き故て有る。伽耶に於ける此順禮は、實に彼れをして商羯羅派の乞丐僧たらしめたるものにして、此時以來彼れは、身心共に大いなる變化を被つたので有る。

チャイタニヤは、ナデアに歸りたるが、其後殆ど自己の研究及び教職をも放棄し、專念一種の宗教的訓練を組織し、且つ彼れの信仰の迅速なる播布の秘論たりし、サンキルタン(Sankirtan)と稱する歌謠を創始したり。此時ナデヤに於いては、已に秘密シャクチ崇拜者有りて、先優の勢力を振ひ居たりしかば、チャイタニヤは彼等及び其市の同々教政府を憚り、サンキルタンは最初私にスリバジヤと稱する共同製作者の宅に於いて行はれた、從ひて彼が其門下に對し、自己の家庭中に在りて、其を讃頌せよと命せしは、甚だ後年に屬するので有る。然るに彼秘密シャクチ崇拜者の徒は、斯かる擾搖を寛容す可くも有らず、又カヂ官は其門徒の不平、苦情若しくは訴へに應じて、家々に於ける樂器を破壞せしめしのみならず、又復唱の障害を嚴密に禁じた。されどチャイタニヤは、流石に此政府官吏の命令を蔑視し、更に强固なるサンキルタンの三團隊を組織し、自己は其一方の指揮者の位置に立ちて、カヂ官の家門の前に行進したり。カヂは、此時已に固く門戸を鎖して、此れを防ぎたりしが、特にチャイタニヤの遣はせし使者に應じて、漸く戸外に出て來り、暫時問答の上、終に二人は親密なる友人と成つた。即ちチャイタニヤは、カヂを非難するに、彼れが戸前に於いて最も適切に、來訪の客を待たざりしを、此同々教徒の行爲に非ざるを以てせり。此所に於いてカジは、此恥辱に對して餘義なく謝罪したりしが、其結果、諸團隊間の和睦調停となり、終に同胞宗教徒として、近者、便宜に研究模倣等互ひに交渉する所有るに至つた。斯くしてチャイタニヤは、ナデヤの同々教官吏を自己の友人とし、偖て以前よりも數倍の勇氣、活力を以て、サンキルタンを宣傳したりしかば、紇里濕那崇拜に對する彼れの狂熱は、頗る强固に發展しつゝ有りし事疑ひ無い。彼れは、唯に此れに止まらず、素人演劇の一團を組織し、自己は紇里濕那の結婚せし配偶ラクミニイの役を演じたりと云ふ。斯かる漸進的行爲は、彼れの若き血を更にも燃やし、其印象深刻なる精神をして、殆と熱狂妄進の境に導きたり。彼れは、例に依り、或日役者の身振りを爲しながら、「おゝ、乳搾るをみなよ、汝れ乳搾るな

みなよ』と云ひ居たりしが、其時ナデヤ市の梵語學生の一人は、彼れを沒常識なりと非難した、彼は此れを聞きて大いに怒り、終に其棒を以て學生を窮迫したり、此所に於いて、ナデヤのシャク、チイ崇拜に屬する梵學者并に其學生等は、兼て待ち設けたりし彼れに對する迫害の善き口實を得たりとして、直ちにチャイタニヤを攻擊した。若き豫言者には、此事餘りに手剛く、從ひて彼れは全く此市を去りて、商羯羅阿闍梨の創立せし僧院の一に入らむと、決心の臍を堅めたりし折りしも、ケシャワバーラチと稱する商羯羅派の一僧は、彼れを訪問し、直ちにカトワに伴ひ行き、遂に其派の一員たらしむるに至つた。因に云ふ、予が常に乞食僧と云ふは托鉢僧て有る。

以上陳べ來りしチャイタニヤの青年時期に關する叙述は、唯僅かに奇蹟的部分を除き、他は總て彼れの物質的事實を包含するものて有る、されば彼れが乞丐僧たるに至れる原因として、彼れの傳記中に論及せらるゝ諸多の狀態は、充分明瞭にして又解し易き事て有る。然も彼れが、此所に至れる他の原因の有無は、歴史としては滿足且つ充分の材料を供給せぬ。縱や一歩を讓り、彼れの個人的性質は、決して非難す可きものに非ずとし、又實際に彼れが爲せし唯一の動機は、紇里濕那崇拜に依る秘密派の動物的儀式、卑賤なる事實に基くとするも、尙ほ且つ偉大なる宗敎改革者としては、到底認むる事出來ぬ。彼れが極力排除せむとせし企圖は、頗る惡く、彼れが其れに代へて興へむとせしものは、誠に常規を逸したるものて有つた。併し彼れが其門下の徒の間に、全く禁酒及び菜食主義を勵行せしは、吾人の一顧に値ひするものて有らう。但し宗派的觀念に依りて、依估偏執せざる人々に取りては、秘密派の躁宴及び紇里濕那の急投媚を呈する)たる毘濕奴派の模倣との間には、殆んと擇ぶ所無い。之れを要するに、吾人がチャイタニヤの爲に主張し能ふ最極の點は、紇里濕那の不正なる情事を、精神的意味に於いて輕視せし事、及び自己の門下が決して官感の慾望滿足を模倣せざりし事、此等二點に在る。さり乍ら、彼れの全生涯は、たとひ一見屢々狂氣の如くなりし事有りしと雖も、尙ほ胸中稀れに見る政治家的天賦の才能を有したりしが如し。されど、又彼れが其敎へ說きし儀式崇拜より推して考ふれば、現時見らるゝが如き結果を全く豫期す可きて有る、即ち眞の初學者、初心者が、Bhagavat 及び Brahmavaivarta に依りて供給せられし種子の存在は、終に樹木の果實たる事を豫め了知せねばならぬ。縱しチャイタニヤ自身の性格は、

純潔にして又自己の利益を獲得せむとする何等動機無かりしとするも、其れが爲めにナデヤの同胞階級間に於ける彼れの競爭者及び迫害者に對し、無暗なる野心を以て、彼等を憎排する事決して無かりしと云ふ必然的結論は來らぬ筈て有る。其後繼門徒を引き着くる事に關しては、今日行はれつゝ有る所謂誘導の態度を取つたので有る、吾人はチャイタニヤの生涯中に於いて、彼れの道德的標準は、一般支配者、政治家、及び自己の屬する團隊の爲には、其重要なる部將をも犧牲にして、尙ほ且つ顧みざる諸將軍よりも、一段進歩せしもの有りや否やは疑問て有る。若し其れ大將軍の一人が、彼トムミーアスキンスの上機嫌をも持續する爲に、直接不道德なる行事を奬勵し得るものと假想せば、一派の開祖に依りて爲されし同一の奸計も亦全く驚くに足らずと云ふ可きて有る。此所に於いて、最も安全にして合理的論斷は、凡そ豫言者又は權化と稱するものは、歸する所、政治的冒險者輩に等しと云ふに止まるもので有らう、卽ち必要に迫られたる時は、兩者共に道德原理の許さゞる多くの事をも爲し得る珍現象て有る。

チャイタニヤは、唯に最下級人の入派するを許すのみならず、又回々教徒すら其門下として認むる。彼の重要なる三大弟子は、ラップ、サナタン及びハリダスにして、彼等は何れも回々教徒て有る、而も前二人は、自己の意志に反しつゝも、止むを得ざる事情に依りてイスラム教徒と爲りしが如く、又ベンゴールのハッサイン、シャー王の朝に仕へて、甚だ高位に卽き居たりと云ふ。而して彼等は、王朝を辭して後、直ちに再び印度國民の社會に歸るを許されずして、終に止むを得ず、チャイタニヤの門徒と爲りしもので有る。ハリダスに至りては、異教徒に依り頗る惱されつゝ有りし憐れの回々教徒なりしが、チャイタニヤは此を見て、自己の身邊近く招き寄せ、以て其同胞宗教家の迫害より保護する所有りける程に、流石に暫時は彼れの門下の苦情攻擊を憚りて、稍距りたる場所にハリダスを置いた。偖てチャイタニヤの生涯中には、勿論種々異なりたる出來事有りしが、中にもヤワナを最も愛せし事は、頗る確實なる事實て有る。現時に有りては、チャイタニヤ派の教師は、決して回回教に服從する事無しと雖も、多數下級劣等者の爲には、力を致して惜まざるものて有る。斯かれば彼チャーマー、ドム、バウリ及びバグヂ等の階級をも、時に門徒として入るゝ事が有る、卽ち彼等の斯かる態度は、自由精神を有する證左なりと考ふ

可きて有る。併し此見解が、直ちに彼徒の精神的運動の間に、諸種の不幸慘害有りし事を含み、又多くの點に於いて、矛盾不調和有る事をも算用す可きを意味するものて有る。チャイタニャ派の中には、殆ど他の總ての宗派の如く、亦托鉢僧と家長との二部分を有す。チャイタニャの家長間の重なる人々の中には、チャイタニャ自分の直接の弟子、及び使徒とも云ふ可き者の末裔が有る、彼等多くの中には、純粹波羅門主義の否定する、所謂諸品賣買に依りて生活し、從ひて此は貴族的印度民より輕視せらるゝ傾向有りと雖も、又彼徒の或者は、多くの弟子よりの獻上物、及び自己の所有に屬する諸僧院の收得等より入り來る收穫に依りて、殆ど王族の如き生活を爲す者等も有る。ナデヤに於ける多くの寺院長老(Gossain)は、チャイタニャの第二の妻たりしビシユヌプリヤーの父の後裔なれども、此派の典據とす可き經典中には、斯の如き長老として彼等を認めて居らぬ、而して事實彼等は、自己の利害否利益の爲に、一部分チャイタニャ派の信仰に改宗せし、シャクタ波羅門の徒て有る、從ひて彼等は、自己の世襲的相傳たる可き此派の大寺院に於ける勤行中に、其信徒を導くの外、屢々シャクチ秘密崇拜者の如き行爲を爲すものて有る。チャイタニヤ後繼者間に於ける最高位置は、曾てアヅワイタ及びニトヤナンダに依りて代表維持せられ、彼等を呼ぶに、two problus 卽ち二人の主の稱號を以てした。然るにチャイタニヤは單に大いなる主と呼ばるゝに止まれり。此アヅワイタは、シャンチブールのバーレンドラ婆羅門出身にして、今尙ほ其地方には彼れの末裔多く住して居る。而してニトヤナンダはバリヤ族の婆羅門出身にして、バーブーム州の人、而も彼れは同州ケンヅビラ村に、其本部を有せし勝天(Jaya-deva)派の、ニマート毘濕奴派て有つた。此れに依りて考ふるに、チャイタニヤ派が羅陀女を信仰する毘濕奴を構成せしは、恐らくニトヤナンダの勢力に依る事、稍明了に想像せらるゝ譯て有る。ニトヤナンダの末裔後族は、今重にカルカッタ及びバラックプールに近きカールダハと稱する村落に居る。偖て以上の二者に次ぎて、Gossain と呼ぶ六人組みの一級有りたりしが、此は何れも婆羅門に屬せぬ、併し其後裔は非常なる尊敬を受けたること明かて有る。

バイラジ(Vairagis)と稱する、所謂チャイタニヤ派に屬する乞丐級には、男女兩姓を含有す、男子の方は Babaji と云ひ、女子の方は Mataji と稱する。されど、彼等の間

に存する實際の禁慾苦行者の數は皆無に非ざるも、甚だ少なしと云て可い。又此等バヾジ及びマタジの多數は、公然夫婦制度を立てて生活す、唯僅に異る點は、バヾジは修行者の服を着け、マタジは寡婦の裝ひを爲すに在る。バヾジの或者等は云ふ、我れは最早やBrikatなり、卽ち世界の總ての者を嫌厭せりと、何ぞ知らむ此徒は、放埒亂行に身を持ち崩したる面々なる事明かて有る。斯かる敎徒は、僧院内に住み、婦人の階級を極度に嫌厭せる結果、食物すら自己の手に調理し、決して婦女子の庖厨に入るを許さぬ。されど彼等獨身の誓約を實際に見るは、甚だ困難なる事前已に陳べたる如くにして、恐らく此事印土のみに限るまい。

總じてチャイタニャの徒は、禁酒家にして、左迄有害の民て無い。乞丐者の間に存する憐れなる者は、戸毎に一握の米を乞ふて生活すれども、又此修行者の間には、甚だ財豐かなる弟子を有し、何の苦痛も無く生活し能ふに足るの收入を有するもの有るが、其多くは建築、改修及びくちすぎ、順禮等の資に消費するが普通て有る。而して彼等は、時々豐財の信者を取り込み、其僧院に對し、甚だ自由なる大寄進を爲さしむる事有るは、何處も同一の事と見て可からう。

ナデャに於けるチャイタニャの誕生地には、頗る隆盛なる多くの僧院在りて、毘濕奴信仰の順拜者及び寄寓者等を、篤志の來客として、甚だ厚く取り扱ひ、食物住室等、總て已に準備をして待て居ると云ふ。縱し、此等大寺院の長老等が、外來の支配役に依りて聊か宿屋の番頭の如く取扱はれ、又稅金までを賦課せられたりと雖も、其宗派内に於ける位置に至りては、頗る高大なるもので有る、從ひて屈從抑壓は、彼等の堪えざる所にして、印度中有數なる斯かる大宗派の寺院が、斯く取り扱はるゝは、甚だ遺憾に堪えずとする所で有る。

チャイタニャ派に屬するバヾジの大多數は、純粹なる首陀羅階級に屬し、たとひ彼等が同一平等を自ら主張するも、彼カヤスタ雜婚階級の徒は、其中に在りて、終に最高位置を占め居る事眞實て有る。而して此派に屬する僧院の男子は、子供を有するもの、或は有せざるもの等種々の範圍に擴張せられ、其信者は一般甚だ尊敬す可き人々なりと云ふも可なりて有る。然雖又其中には、多くの惡漢無きに非ず、卽ち精密に探求すれば、或は巡査の追求を避けむとする犯罪囚有り、或は非神聖なる姦事に依りて、自己の階級より絶交せられし無賴漢等有りて、一々枚擧する事出來

ぬ。チャイタニャに屬する階級は、多くの他派に於けるが如く、正統派の形式に從ひて結婚を許されざる獨身者、及び鰥者等多數混在の樣なる事勿論て有る。而し て此派にも尼僧が居る、彼等は重に諸市の老朽不幸なる婦女子に依りて補充せられ、又時に低き階級の不貞淫蕩なる寡婦の入派するもの決して少くない。此派の僧服は、長さ二ャード內外にして、緣を有せざる綿入衣の片より成り、Bahirbas 卽ち外方に向へる衣服を有する腰帶より成れるもの、唯Bahirbasは時に畫黃の根を以て、黃色に染めらるゝ事有りと雖も、一般に云はゞ、チャイタニャの僧服は、白色のものが多い。併し僧服としての白色は、彼商羯羅派のダンデス及バラマハンサ等の赤衣の如く顯著にして、有りがたげなる外方の見と、感を與へずと云ふは、流石に印度流て有る。チャイタニャ派は、羅勤の木を重寶し、其首飾り、珠數等總て此木の實より製作し、其葉は種々なる飮食物と共に食用に供するもので有る。偖此派は、敎師の指導に從ひて、其前額に畫くものなるが、其は一般毘濕奴派の垂直線を以て、捺印の標章とする、されど其下部には竹の葉、又は羅勤の葉の如きものを畫けるが如く、繪の具は牛頭栴檀の薄き黃色を使用する。此派の信徒は、唯に其前額に畫くのみならず、身體の他の部分にも着色する。併し一般に、ラーマヌジャ、又はマヅワ派の如く、烙痕を捺さざるは甚だ異なる所有るが如しと雖も、實は牛頭栴檀の溶解液に浸されたる、金屬製の印章に依り、日々彼等の念ずる諸神の名を、腕及び胸部に印象するので有る。斯くして彼等は、神に對する敬虔の證と爲し、特に其腕、身體にGoraなる名を畫く事に依り、自ら嘲弄の記號と爲すは頗る珍現象て有る。Goraなる語は、梵語の黃色を意味するGouraの廢語て有る、而して此はチャイタニャの多くの名の、一に使用せらるゝのみならず、Kāla卽ち黑き印度兵より、英國印度軍隊の英兵と對比區別する爲の語とせらる、斯くして Gora なる語の二重の意義に依りて、標章を有するチャイタニャの價値、卽ち一般戲弄せらるゝ點をも容易く了解し得可き譯て有る。印度に於ける高地聯隊が、ナングタ、ゴラ(Nangta Gora)と呼ばるゝに習ひ、剽輕なる婆羅門は、バヾジに請ひ、以て同一語を附せざる卽ち單にGoraと畫くを避くるものて有る。

世界中、大敎師多しと雖も、チャイタニャ以上に自己の宗敎をして通俗化し、或は一般化したる者は無からう、卽ち彼徒は、一方に於いて學者又は流暢なる雄辯家た

るを要せざると同時に、他方又如何なる時、如何なる場所に於いて、如何なる人の崇拝儀式を擧ぐるをも妨げぬ、其運用の妙は、唯單純其れ自身の如き觀が有る。

まこと敬虔なるチヤイタニヤ派の人々は、其儀式實行の時、必ずしも自己の側に僧侶有るを必要とせず、卽ち彼等は、唯身體に書き、珠數を操ぐるのみて有る、從ひて難澁なる準備卽ち梵語流に崇拜する人々の如き知識をも必要とせざる事勿論て有る。扨てチヤイタニヤの使用する標章を書く材料及び珠數等は、すべて商店に得らるるものにして、其價ひ甚だ安く、如何なる貧乏人と雖も、常に求めて座右に携ふる事が出來る。飜つてチヤイタニヤに依りて發明せられし、宗敎播布の最も有力なる機關を見るに、兎に角前條サンキルタンと稱する音樂的行進に有ると云て可い。印度敎寺院中には、沈默の儘、重なる神に對して花、錢及他の種々なる供物を獻ずる場所が有る。併し印度敎諸市には、基督敎會の如く、若しくは回々敎寺院の如きもの少く、從ひて常に僧侶の布敎傳導を爲す機關を有せぬ、此れ印度敎が前二宗敎及び佛敎の制度と異にし、消極的なる所以にして、やがて此れ世界敎たり能はざる理由て有る。且つや異國人に對しては、汚れたる者として、自宗敎に入るを許さゞるに至りては、終に猶太の國民敎以上に出づる能はざる所以て有る。斯くて印象深き語に依りて衆徒を吸引せむとせば、自ら一種の力を有せねばならぬ。彼市中を巡回する爲のサンキルタンの團隊は、何の困難も無く組織せられ、然も一般說敎又は布敎よりも、一層効果有りし如くて有る。

チヤイタニヤの目的とする所は、佛陀の如く、如何やうにかして自己の後繼者として、僧侶團を全部收容せむとするに有つた。されどナヂヤの豫言者は、自己の目的を遂行する爲の手段方法に於いて、世界古今何れの宗敎的先達者よりも、最も奇にして良き道を採用した。佛陀は、最初凡人を疎外する傾きを有し、普通人には解し易からざる敎へを宣說したりと雖も、此れに有りては、Bhakti 卽ち熱心敬虔なる信仰、此れ神に達する唯一の方法なりと敎へた、而して此 Bhakti の種類を次の如く考へた。

(一)自己の神に對して、恰も僕卑たる如き深き信心、

(二)友人に對し友人たれ、

(三)子供に對し親たれ、

（四彼女の情人に對し貴女たれ、

斯くしてチャイタニャは、羅陀女崇拜を奬勵し、敎ゆるに其の信仰の最良形式は、羅陀女が紇里濕那の至愛せる婦人として、彼れに向けたる其心境に在る事を以てした。其故チャイタニャの儀式は、Bhakti Marga 卽ち篤き敬虔と呼ばれ、彼梵語學者の Jñâna Marga、無學無識の瑜伽者たる Yoga Marga、及びバラワ派の Pushni Marga 等と對別せらる可きものて有る。チャイタニャは、斯かる宗敎的情緒を發得し得ざる人々に對し、紇里濕那及び羅陀女の名を繰り返して唱へしむる事を奬勵した。されど斯かる實行は、信徒をして、身心共に努力勤勉せしめず、又信神に對し、高尙なる性質を獲得せしめ能はざる傾向を有するものて有る。

チャイタニャの最も肝要とする崇拜儀式の狀態は、隱密秘傳的の手段方法を否定、又は拒絕するに在りと云が、卽ち何事も赤裸に隱す所無く實行する自然主義的態度は、蓋し此派の眞相て有らう。ベンゴールに於ける毘濕奴派の大豫言者は、彼れの門徒に告ぐるに、何事も秘す可らず、斯く〳〵に在らざるものを、斯く〳〵なりと、僞りて揚言す可らざるを以てした。此點、彼タントリック秘密派の信仰と甚だ異にせるもの有りと云て可い、但し兩者の得失並に偏不は、今云ふ所では無い。

チャイタニャ以前に於いて、摩蒐羅は紇里濕那信仰の中心て有つた、而して紇里濕那と乳搾女との、なまめかしき話題の場所たるブリンダヴンは、實際未だ森林たりし事明かて有る。乃ちチャイタニャは、其弟子ラップ及びサナタン等と共に、其地を開拓せしのみならず、富蘭那に於いて、特に神聖地と稱せらるゝ地點を見て、其後大殿堂を創立し、以て今日有る如く發展せしめ、其の市の中心核を形式したのて有る。

チャイタニャの生地には、彼れの偶像を祠れる殿堂を建設した、而して其は、彼れの生存中に在りては、第二の妻ビシュプリアデビイの創建にかゝるものとせられたるが、前世期末の頃、バギラチイ河の接近范濫に依りて押し流されたりと云ふ（印度にては河床の移轉古今珍らしからず）。然れども、其殿堂中に收めたりし偶像のみは、已に有價値のものと成り、恐らくビシュヌプリアーの父の後裔に依り、今尙ほ保存せられ居ると云ふ。

ナデヤの地が、サクタ王の勢力の下に在りし時は、其偶像元より秘せられたるも

のなりと雖も、ガンガ、ゴヴキンダ、シングガハスチングスが最も有力なる人と成りし時、彼れは終にナデヤ王のチャイタニヤを迫害を救ひて、大いに功を奏するに至つた。斯くして長くGossainに依りて隱されし古きチャイタニヤの偶像は、此所に再び呼吸を復活し、一大殿堂の中に祠らるゝに至りぬ。其他の殿堂は、此れに次ぎて續々興り、ナデヤに於けるチャイタニヤ派は、今其數の上より、殆と其地人口の先優權を占め居るが如き觀が有る。偖て又ガンガゴビンダは、今の市街の西北に當れるラーマチャンドラブール村外に、自ら數個の壯大なる殿堂を設立したりしが、此等は何れも、彼バギラチイ河の范濫に依り、已に早く彼れの子孫なるラバブの時代に至り流出し去つた。此ラバブは、自らチャイタニヤ派の托鉢僧たりし故を以て、頗る有名なりしが、彼れはナデヤ附近に新殿堂建設を企てずして、却てブリンダワンの地をして、自己勢力の中心、若しくは本部たらしめむ事の一層適切なる事を考へた。即ち其所に、高大なる神殿を建築して、純粹印度教の原始的狀態を地方に復興せむとし、紇里濕那の遊歷せし地方の所有村落に對し、地方課賦金の束縛より自由ならしめむ爲、頗る熱心なる行動を取るに至つた。此所に於いてか、爾來ナデヤの地は、ガンガゴヴンダの徒黨に依り、殆ど全く忘れられたるかの如き狀況に至りしかど、チャイタニヤ派は、縱令繼者の保護を得ずとも、今や其發生地に在りて、英國支配下に尙ほ隆盛に存在して居る。豫言者は、常に自己の國に容れられずてふ語は、たとへ反論逆理の如くにも聞こゆれど、實は永久の眞理を含むが如くに見ゆ、而して何人も彼れのVaiet de Chambreに對して英雄たる能はずてふ諺語は、其格言を體現せし眞理の特別なる場合ひなりとす可きて有る。チャイタニヤが、全くナデヤの地を去りてより、已に殆と四百餘年を閱す。彼の最高慾望は、其傳記に從へば、當時彼れの鄕市に住せし婆羅門族より相當の尊重を博し、厚く取扱はるゝ事に有りたるが如く、而してナデヤの市民は、何故か、代々彼れ及び其徒を憎嫌した、併し今や漸く潮來り、風此れに從はむとするの狀有りとすれば、チャイタニヤたるもの、以て死後の光榮とす可きて有る。偖て此派殿堂所有者の手に入る淨財は、實に其新信仰、新崇拜の得益より來るものにして、其はナデヤ市のシャクタ婆羅門の徒の眼を驚かす如きものて有つた。而して、既に彼等の大多數は、チキイタニヤ信仰の標章たる羅勤樹の首飾りを纏ひ、或は或者は己にチャイタニヤ殿堂を公設せむ

とするに至つた。若し果して其當時に於けるが如く、總て其が發達成功の見込み有りとせば、更に或は多くの伽藍堂塔及改宗者を得むと企つるに至る、又自然の事て有る。若し今にして、大豫言者チヤイタニヤを地下に呼び起こし、再び彼れの生地を見舞はしむる事有らむか、恐らく彼れが開宗の最初に於いて懷抱せし、最高の目的たりし同胞階級よりの讃嘆を、尙ほ且つ受け得ざる可きものあらむか。卽ち彼れの心眼に映ずるものは、自己の最も神聖なる豫期を越え、遙に逸脫したものて有る。此點に於いて、實に彼れの組織せし一派は、驚く可き大團隊となり、若し彼れの舊敵にして、宜しく身を屈し其門徒たるに在らざる限り、殆ど顏色を失する如き觀が有る。

第十二章　グジラトのスワミ那羅延派

スワミ那羅延派(Swami Narayan)は、現時グジラトに於いて根據を堅めつゝ有る、其開祖は青年時に、商羯羅派の苦行者たりしローヒルカンドの婆羅門族にして、彼れの僧侶としての名は、元、サハジャナンダと云ひしが、其後毘濕奴派の敎師と成りし以來、一般にスワミ那羅延と稱せらるゝに至つた。一八〇〇年其古鄕を出て、巡歷の途上グジラトに至り、附近の禮場を順拜した、然るに彼れは、自ら其所なる敎師の許に身を托し、其後暫時、師と共にジャナガールに在りたるが、更にアメダバッドの地に移つた。彼れは此等の地を移り涉りながら、學問及び魔法神通等の方法に依りて、弟子門徒の多數を其身邊に集め、以て地方の婆羅門及び其他貴人の熱心を進促し、且つ刺激した。然れども彼れは何故か、公衆より被らむとする責任の歸與を脫れむ爲、アメダバッドの南方十二哩なるゼデールプールに移轉した、併し此所にても終に身心の平和を保つ能はざりき。斯くて彼れの門徒と地方に於ける他の印度敎民との間に、或は一大衝突を惹起するならむとの口實の下に、ギイクワールの官吏は彼れを逮捕し、終に牢獄に投ずるに至つた。併し公吏の不正慘酷なる此處分は、却てサハジャナンダに對する、一般の同情哀憐を惹起し、其結果は唯徒らに彼れの勢力をいや增しに擴張するのみて有つた。此所に於いて、彼れの功績を讃嘆する冊誌は公刊せられ、慘酷なる官吏に反抗するの呪詛は、發布せらるゝに至つた。萬機はすべて公論に決せざる可らず、流石に無情の官吏も、此勢ひに抗抗す可

くも非ずして、直ちに彼れを鐵窓の中より、放釋するの止むを得ざるに至りぬ。僅かに苦境を脱れしサハジャナンダは、今孟買管區内の、カイラ州の一市と成れる當時の一村ワータルに、其弟子と共に退いた。此時に於ける彼れは、業に既に豫言者たるの時期に到達したりしかば、必然の條件として、地方的根據、及び信仰の根底を確實ならしめむ爲若干の殿堂僧院等を設立せざる可らざる事と成つた。彼れの名聲評判等は、此時早や最高點に達し從ひて此れに要する基金調達の如きは、些の困難をも感ぜざる程て有つた。

スワミ那羅延の宣傳せし宗教は、吉祥天女(Lakshmi)崇拜と、羅陀女信仰とを混合せるものにして、ワータルに於る其二大伽藍中、一は那羅延神と吉祥天女の爲に奉献せられ、他は羅陀女と紇里濕那を祠れる事實に依りて知る事が出來る。グジラトの地に在りて紇里濕那の崇拜は、Chanchor 即ち爭鬪を脱れしむるものとして一般に行はる、即ち此神の偶像は、神殿中に於ける吉祥天女及那羅延神の偶像と共に、摩菟羅を脱れ出てむとして彼紇里濕那が演ぜる部分を表現するものと考へられて居る。スワミ那羅延の偶像亦第二の神殿に於ける紇里濕那、及び羅陀女の偶像と共に、同一消息を傳ふるものとせられて居る。而してアメババッドの市に於ても、亦此れと同じきスワミ派の殿堂が建られて居る。彼ワラバ派に在りては、スワミを甚だ重敵として取扱へり、其は彼スワミ派の權勢の頗る確實にして、到底排斥す可くも在らず、否彼徒と競爭するの位置にすら到達し難かりしに依る事勿論て有る。此所に於いてスワミは、頗る用心し注意して、一歩一歩前進するの態度を取つた、而も斯かる氣分は、今尚ワータル及びアメダバッドに於ける彼れの門徒のみならず、此派一般僧侶の特質として表はされて居る、此れ祖風の遺傳と見る可きものにして、世界各宗教の必ず有する風潮て有らう。縱、ワラバ派教師は、猶其獲得せし勢力の根據を失墜せずして、バニャカンビ及びカヤスタ等を包含する總ての中流階級を占有せしと雖も、然もスワミ那羅延の一層優秀なる道德は、終に土民大王の勢力を顚覆しつゝ有るに比す可も無い。此れワラバ派の權力の漸次衰頽せる徵候て有らう。スワミ那羅延は、此れに反して、急轉直下誠に青年時期の勇氣を揮つた。斯くの如くにしてワラバ派は、中等階級の多くに其教權を張り、スワミは自己の位置の必然より、ワラバ派の許さゞるモチドビダルジ及びナビット等、多くの

下等階級に對して信仰を勸め、甚だ寛容の態度を取つた、さるにても斯かる理由に基きて、彼れが其國人より決して輕視せられざりしは、甚だ自然にして且つ妥當の事と云ふ可きて有る。彼れは不潔なる下等階級の人々を、腕の長さ以内に接近せしめざる事に依りて、自己の悛嚴を保ち、從ひて彼ジャガンナートの地以外に於いては、縱令紇里濕那神に供養せし殘餘物と雖、一度調理せし飲食物を、一般信徒より受けざる事を確く定めた。斯くして彼れは、一方自派に對する下級民の固執を安固ならしめ、又此れに依りて、終に最高階級の人をも門徒たらしめし威嚴と寛大を把持し、以て成功せしものと云て可い。

此派の宗徒は、現時約二十萬人に過ぎずと雖も、其宗規に依らば、曾て入派せし信徒は少くとも他に六人の新歸依者を誘導せざる可らずと云ふ誓約に依りて、漸次其數を增進しつゝ有る。他の印度教各派に於けるが如く、スワミ派の門徒間にも、亦乞食僧及び家長の二階段を有する、而して前者の數は、一千以上に達し、其堅き誓約に依りて、常に獨身生活を守らねばならぬ。彼等は又傳導師として勤務し、其信徒を誘導入宗せしむる爲に、各々組織の隊伍を爲して愉快に地方を巡回し、相互に支持警戒を加ふ、併し其本部に於ける彼等は、常に神殿に接近せる僧庵中に生活して居る。彼等は自作手製の訓誡及び道德的信條を有し、基督教布教師の如き方法に依りて、其を一般人民の間に宣傳するを常とす。偖此スワミ那羅延派は、羅勤樹の幹より成る二個の珠數を所持せねばならぬ、卽ち其一は紇里濕那の爲に、他は羅陀女の爲なりとせらる。前額の標章はU字にして、其中心にTeekaを表する圓形の點と共に畫かるゝものて有る。然るに婦人は、一般Saffron（泊夫藍）の赤き粉を用いて圓形を畫かねばならぬ、而して此の派の托鉢僧は、修行者の鮭色衣服を着用して居る。

ヘーバル僧正は、西部印度巡遊中、スワミ那羅延と會見し、次に掲ぐる如き興味有る記事を遺して居る。

予は十一時前後にスワミ那羅延より訪問を受けたり、此神聖なる人は年齡殆ど予と同じく、中丈中肉寧ろ瘦型にして、一見平凡に見えたりしが、又其容貌穩厚にして且臆病の表情を有せり、從ひて此外何等特殊の點をも示さゝりき。君が殆ど二百に近き馬上の人と共に來りしは、予の少しも豫期せざる所、寧ろ其れに反

したるもの有りき。とは云へ予も亦五十以上の騎馬護衛者を伴ひたりし事を考ふるに至りて、聊か苦笑を禁ぜざりき、而して今二人の宗教的教師が、軍馬を伴ひ、箭筒の音を鳴らし、楯の響きを以て此市を滿たし、小軍勢の先頭に立ちて會見するに至りし事に想到すれば、予の五官は稍〻苦痛を感じ、私に耻づる所無きに非ざりき。若し其れ、兩軍相互に衝突する事有りたらむには、武器、訓練等の優秀に依りて、呼嗚實に疑ひも無く一層の結果を生ぜしならむに、先づ其事無くして止みぬ。さるにても、彼れの軍と予の軍との間には、偖ても道德的訓練の如何なる差異有りしぞ。予の伴ひし軍兵は、縱令忠實に予を保護せしと雖、決して予を知らざりき、又予に對して注意する所無かりき。此れに反して、スワミ那羅延の護兵は、那羅延自身の宗徒にして、熱心なる讃嘆渴仰者にて在りき、彼等は彼等の生命を執意的に、而して唯其れ惟々として奉ずる忠勤の徒にて在りたり、彼れに對し名譽功績を致す事を無上の誇りとしたりき。荒々しく取扱はるゝ自己の衣服の緣よりも、寧ろ勇ましく戰場に出てゝ、最後の血潮の一滴まても戰ふを喜びたりき、ホドネットに於ける予の基督教管區には、曾て一度も斯かる正直なる人人無かりき、されど基督教牧師が斯く愛せられむは何れの日ぞや。

第十三章　ミラバイ (Mira Bai)

ミラバイの名は、西部印度の毘濕奴派、殊にバラワ派の間に尊重せらる、併し彼ミラバイなる婦人は、一派の開祖て有ると云ふのては無い。Bhakta Mala 卽ち毘濕奴派に屬する諸賢人の傳記の著者は、其書中彼女に頗る重大なる位置を與へ、尙多少の奇跡的性質を帶べる傳說的物語りの多くを以て、彼女の名を彼是連結して居る。予が次ぎに揭げむとするは彼ウイルソン氏の印度教諸派 (Wilsnns Hindu Sects) 中に表はれたる、ミラバイの生涯に關する敍述て有る。

ミラは、メタルと稱する地方を支配せる一小土民王の娘にして、ウダヤプールのラナと結婚せり、然れども彼女は、ラナの家に入りて其主婦と成るや、暫時にして女神の信仰者たる養母と相容れず、常に爭ひ居たり、卽ち其爭點は、女神の家族的崇拜に從ふや否やの點に在りしが、ミラ女は紇里濕那の信仰を到底捨つ可くもあらず、從て彼女はラナの寢床及び其宮殿をも放逐せらるゝに至れり。されど

尙注意深く取扱はれ、別に獨立したる家庭を許されしが、此別居は彼女に對する人格的尊嚴の觀念より出てしに非ずして、寧ろ彼女の實際的能力に對して止む無き支拂ひと云ふ可し。但しミラ女は、夫の勸めに依りて、自ら毒を仰ぐ事ありしかど、終に死の運命は彼女を捕ふる能はず、此所に於いて全く自由の身と成れり。斯くて若き紀里濕那の形式を取れるラナチョールの信仰を開始し、毘濕奴派の熱心なる保護者と成りて諸方に漂泊し、ブリンダヴン、ドワラカー等の地方をも巡回したり。此時ウダヤプールにては、毘濕奴派に反對の聲を揚げたるが如くなれども、ミラ女は其家庭に、ドワラカー市より婆羅門を送られし事實有り。其後彼女は保護神の神殿に參りたるが、其信仰の篤かりし故にか、偶像自ら其體の中部を開きたりと云ふ、此所に於いて、彼女は其開かれたる罅隙に飛び込みたれば、偶像再び元の如く閉塞せられ、斯くてミラは終に不可思議なる手段に依りて消失したりと云ふ。

斯かる奇蹟の紀念として、ミラバイの偶像はラナチョールと胞合したる形に於いて、今もウダヤプールに崇拜せられつゝ有る。偖て斯かる奇怪なる事實を誘出せし語句並にミラ女の作と傳へらるゝ語句とは、少しの同異有らむも、畢竟次ぎの二點に歸せらるゝものて有る。

語の一――オー主なるラナチョールよ、予の住所としてドワラカーを與へ、即ち汝の貝と、平圓板と而して鎚矛とを以て、夜摩の恐れを追ひ拂ふ、卽ち永久の安息は、汝の神聖なる神殿を見舞ひ、無上の法悅は、汝の持せる法螺貝及びCymbalの一吹に依りて來る、卽ち我れは自らの愛と、所有物と、重要品と而して夫とを放棄せり、汝の婢なるミラは、汝の袖に陰れて救はれたり、オー汝彼女の全身を取り給へ』

語の二――汝若し我れの汚れ無きを知らば、我れを容れよ、汝の外我れに哀憐を垂るゝ者無し。願くば、慈悲の濕ひを注ぎ給へ。疲れしむる勿れ、餓えしむる勿れ、心惱ましむる勿れ、而して安息を得しめよ。嗚呼願くば、絕えざる衰頽を有する此肉身を滅却せしめよ。ミラの主は、彼女を容れたり、而して汝より離れしむる勿れ。

以上の陳述に於けるミラ女の生涯に關しては、或は眞理を語つて居るて有らう、然し此の記事は、毘濕奴派及び其托鉢僧等に對して、婦人室の同居者を最も濫用不適

當に讃嘆したる嫌ひが有るかも知れぬ、而も此說話の奇跡的部分は、或敏捷なる紇里濕那信仰の僧侶の、一時的天才にのみ歸す可きものに非ざる事勿論にして、或は傳導者の狀態を表現せしもので有るかも知れぬ。

鋭敏なる人に對しては、何ものも不可能で有る、彼れの野心慾望は、殆ど束縛を知らぬ、『石の壁は牢獄たらず、鐵の障壁は鳥の籠にだも若かず』と云ふは、此徒に對してのみ實に眞で有る。ウダヤブールの此派信者は如上の說話を堅く拒みし跡有るも、其反射せる光榮は他を誘引するに過ぎたるもの有り、終に踏々として係蹄に落つるの危險を避くる能はざる如き狀態を呈した。

第十四章　アッサムの大ブルシヤ派

大ブルシヤ派(The Mahâpurushin Sect)は、東南高地アッサムに於いて、最重要なる毘濕奴派にして、彼サンカーデーヴの名を有するカヤスタの創見にかゝるもので有る。父は高地の印度人にして、彼れは母胎を借らずして、紀元一四四八年アッサムのアリプコーリに於いて自分降誕したと云ふ。幼時サンスクリットの健全なる敎育を受け、稍長するに及びて、巡遊者としてナデヤの地を訪問し、此所に彼チヤイタニヤの誘引說破に依り、毘濕奴神を信仰するに至つた。商羯羅は、曾て"Bagabhat"及び其の他重要なる毘濕奴派の富蘭那をアッサム語に飜譯せし外、毘濕奴派信仰に於ける或根本的著作を爲した。抑もアッサムには、サトラと稱せらるゝ此派附屬の數個殿堂有り、何れもカリタ階級に屬する長老に依りて支配せらる、而して其の重なるものは、ナムガール及びボーナガール等の地に在る。ナムガールは、一會堂として、信者此所に集合し、毘濕奴の名を無數に繰り返せる書典を朗讀し、或は讃歌を誦するもので有る、但し商羯羅の偶像崇拜に反對せし事をも、此れに依りて知る事が出來るで有らう、併しナムガールの中には、又彼"Bagabhat"の一部を恭しく檀上に祠るもの有り、且つサトラは其崇拜の對象物中に、商羯羅の足跡を刻印せる石の小片を有し、後繼者則ち信者等は、此等足跡に對して、眞實誠心を以て讚嘆渴仰を捧ぐるのである。ボーナガールのは、Nat Mandir 卽ちベンゴールに於ける、印度敎神殿の舞踏室に相當するもので有る。例へばサンカーは、宗敎的性質を有する、若干の演劇書類をものし、ボーナガールは此等を世に發表せむとして劇を演ずる事

が有る。

サトラの最重要なる地は、ノヲゴン州に於けるバードワ、及びゴムチ州に於けるバーベタ等である。偖て大ブルシア派の乞食僧は、ケワリアと稱せられ、彼等の爲にサトラに接近して、多くの僧庵を置く。婦人の信仰者は、サトラの中に住するを許るれども、崇拜儀式の時に於いては男子と混座する事が出來ぬ。

サンカーデーヲ及び其重なる弟子マダワーデーヲの墓は、バーベタ、カトラの中に在る。

第五編　半毘濕奴派及びグル崇拜派

第一章　ベンゴールの不正チヤイタニヤ派

チヤイタニヤに關して、以上已に陳述せる所に依り、其大多數の信者は、次の如く分級せらるゝ。(一)ゴッサイン (Gossains) 此はチヤイタニヤの弟子の末裔。(二)獨身者なるブリカート (Vrikats)。(三)一般人の信仰者。チタニヤ派の一般信者の位置は、唯現世の生活狀態、其人の身分等に屬し、チヤイタニヤ派信仰を表すると表せざると、云ふと云はざるとは、彼等の公生涯に何の關係無く、又彼等を上下する事無い。婆羅門族なるゴッサインは、劣等階級者に對して經典の神聖なる儀式を施こし、依りて以て彼等の優待を受くるの故を以て、非チヤイタニヤ派より侮蔑を被つて居る。從ひて貴族的婆羅門は、チヤイタニヤ婆羅門の家庭に於いて、調理せられたる食物を一切避けて取らぬ。併し此は結婚に依りて、二者を和解調停する事常て有る、而も一般に云はゝ、ゴッサインは印度教社會に於いて甚だ貴重なる位置を有する

ものにして衣服、生活共に總て一般家長と同じて有る。

ブリカートの大多數は、純粹なる首陀羅階級の人々にして、彼等は一般獨身生活を守らねばならぬ、而して其程度は、少くとも婦人が食物を調理するを許さゞる範圍に於いて、甚だ憎嫌せるものて有る。彼等は多く寺僧にして、勿論其寺院内に住居し、生活は其弟子及び此派一般の信者歸依者に依りて支持せらるゝものなれば、他派の乞食の如く、人の戸外に立ちて食を請ふが如き事甚だ稀れて有る。彼等の中には、教育を受けたる人々も有る。彼等は其派の宗教的文學研究に、相當なる時間を消費し、近隣に於ける同寮宗教家と共に、其を暗誦するが常て有る。併し信徒の多數は、無教育文盲にして、水浴、塗身及び珠數を手繰る事等に時を消費するのみて有る。彼等は又特別なる、併し餘り嚴かならざる正服を着して居る。其宗派内に於ける位置は、尙ほ甚だ高しと雖も、一般印度社會には、多少野師似而非漢として輕侮せられて居る。

結婚若しくは婦人に接するだも許されざるブリガートの外に、僧侶の如く身を裝へるチヤイタニヤの或特殊階級が有る、されど此等は規則正しく婦人を有し、公然社會的關係を、持つものなれど、一般には社會的位置甚だ低い。則ち左の如く區分せらる。

（一）サン、ヨーギ（Sanyegi）（二）スバシユタ、ダヤカ（Spashta Dayaka）
（三）サハジア（Sahajia）（四）ナラ（Nara）（五）バウル（Baul）

予は更に進むて、以上の各々に關して少しく紹介する。

（一）サン、ヨーギ――此は其名の示す如く、結婚せし人々て有る、從ひて普通の家長の如く衣食住す、彼等は總て市中の種々なる不幸災難に相遇せる人々より成立して居る。

（二）スバシユタ、ダヤカ――此は半ば寺院派にして、一見托鉢僧の裝ひを爲せりと雖も、其僧及び尼は、同一僧院内に住し、相互關係に至りては殆ど此所に記載するを要せぬ程汚れて有る。但し、彼等自ら此派に入りしは、其低階級を證するものてある。此派の所謂僧侶は、唯其首に懸けたる一條の羅勤樹の珠數に依りて、識別し能ふものとせらる、而して此派の尼僧は、頭部の中心に一總を殘す外總て剃髮する。其前額の標章は、他のチヤイタニヤの其れよりも、色薄く

形少なる丈けて有る。又此派の僧は、尼と共に公然手を取りて舞踏し、且つ歌ふ習慣が有る。

(三)　サハジア――此派は羅陀女信仰の最も進歩せる形式を代表せるものにして、信徒は各自紇里濕那にして、各婦人は羅陀女自身なりと教へ、從ひて男女共グルなる教師に接す可き何等必要無しと考へらる。知る可し、斯かる根本信條の結果は、混雜せる交際に何等の制限無く、團隊間の種々なる傾向若しくは衝動等自由に演ぜらるゝ事を。

(四)　ナラネリ――此は甚だ劣等階級のチヤイタニヤ派て有る。ナラは男子にして、ネリは其結合せる婦人を云ふ。彼等の特質は、夫婦共に歌ひ共に食を乞ひ、而して決して別れざるに有りとせらる。一般に、カンタ卽ち一緒に綴り合せたる襤褸の上衣を着用する。左に掲ぐるは、ベンゴール語より成れる歌の直譯にして、婦人の義務に關し頗る可笑しき記憶を與ふるもので有る。

『そなたはゴールが好きかいな、好きなら私しの襤褸の蒲團を、そなたの肩に、載せて運むて支度をするが、偖て善いわいな。そなたは私しの襤褸の蒲團を持つて、私しと一緒に出かけて行つて、慈善の巡遊おしなさい。そなたは毎夜木の下陰に、寢ねて私しの大麻の、パイプを時々用意せにやならぬ。そなたは、なう、ゴールが好きかいな、好きなら私しの敷布をば、そなたの肩に載せて運ぶが善いわいな。』

(五)　バウル――バウルなる此派の名稱は、狂人を意味する梵語 Vātula より來たものて有る。彼徒は甚だ劣等階級の人々にして、能ふ限り不潔に見えしめむとする特點を有する。其正服は、圓錐形の頭蓋帽、及び肩より足部下方まで擴がり、垂るゝ長き汚き襤褸の綴り合せなる短表衣より出來て居る。而して其衣服のみならず、樂器、舞踏、頌歌等總て彼等の慰籍とするところ、奇怪千萬のものみてある。併し其奇怪にして功妙なる諷喩、及び歌曲の粗野なる哲學は、一般劣等階級者の甚だ貴重なりとして味ふものて有る。此派全體の表現せる容態は、甚だ遊樂的又は浮かれ調子にして、ベンゴールの重なる市には、大概祭典の時此徒を模擬して、大歡喜の遊興を成す、大團隊を組織する程てある。

バウルの徒は、毘濕奴崇拜派なりとせらるゝも、適切に云はゞ無神派て有る。卽ち

彼等は偶像を崇拜せず、然も其説明する理由に依らば、甚だ進歩せる宗派なりと考らる。されど彼徒の主義教説に從はゞ、宗教的實修訓練の第一義を爲せる形式は、男女両姓間に於ける耽溺て有る。而して彼等は、身體局部の排泄物より成る溶液を飲む事に依りて、特に能く知られて居る。實に此徒の如き、或は又他の諸派例へばカータバシャ、マージ、バルッダシ、アババンチ及びサトナミ等に於ける道德的狀態は、誠に悲む可き、否憐む可きもので有る。而して如何なる方面に在りても、彼等を救濟せむとする盡力、骨折りの試みられざるは、一層の悲痛を感する次第て有る。唯貴族的婆羅門のみ、彼等を人道の柵内より放逐し、此れを罰し能ふものにして、近代宗教は寧ろ彼等に與ふるに好遇を以てして居る。併し彼等は餘りに劣等てある、然も新入改良の宗教を以てするも、到底其匡正不可能の如くに見ゆる。若し夫れチャイタニヤ派のゴッサイン、基督教宣教師及び同々教布教師にして、此徒を改善し能ふとせば、實に人類の永久感謝に値ひするものてあらう。

第二章　高地印度に於ける不正毘濕奴派

其一　ラダ、バラバ (The Radhâ Ballabhis)

予は既に早き時代に於ける紇里濕那崇拜派が、紇里濕那と共に其結婚せし妻をも、同時に信仰せし事を述べ、又彼羅陀夫人は今尚讃嘆渇仰の中心と成れる事をも合せて記載した。ラクスミイ即ち吉祥天崇拜及び紇里濕那の配遇としての羅陀女信仰等は恐らく十五世紀に起りたるものにして、其を誘介せしものはニムバヂトヤ若くはチャイタニヤて在たやうて有る。而て此のラダーバラビ派は、紇里濕那自身の信仰に對するよりも、一層重要熱烈に、彼羅陀女を崇拜する者にして、其開祖は一般の説に從はゞ、十六世紀末葉に存在せしハリワンスなりとせらる、而して又羅陀バラビは、ヴラワバ派の一小派なりともせらる。何れにしても、此派は本部をブリンダバンに有し、其ゴッサイン及び神殿堂は、高地印度の各部分に存在する。

其二　サキ、バワ (The Sakhi Bhavya)

サキーバワ派は今より五十年以前甚だ重要なる位置に在つた從ひて其派内には當時唯僅少の善良人のみなりしが、今や殆ど時勢の流れに押されて消滅したるかの觀が有る。此徒は、彼等自らサキイ、即ち羅陀女の友人として考へて居るやう

である、其特質氣分を、最高可能の程度まで擴張せむ爲に、女子の衣服を着け、婦人の裝飾を爲し、而して唯女子のみに可能なる或生理的狀態を假裝するものである。

第三章　ベンゴールに於ける不正教師崇拜派

其一　カータバージャ (Karta-bhajas,)

カータなる語は、其字義正に Doer を意味す。此はベンゴールの語にては、共同家族の行政長の意義を有する者にして、カータバージャなる全體の語としては、英語に "Adores of me headman" と譯す可きて有らう。此派は、ベンゴールに於いて、グルなる教師崇拜者として呼ばるゝ階級の最も重要なるものにして、ラーマ、サラナ、バルと云へるサドゴバ階級の人に依て創始せられた。彼れは東ベンゴール鐵道のカンチヤラバラ停車場附近なる、ゴーシユバラ村に住むて居た。彼れは近代起れる、他の豫言者の多くの如く、亦不可見の大教師より、無上の力を得たりと揚言し、アウルゴツサインは、彼れの感應の源泉として認めらる。併し此ゴツサインは、彼れの承繼者に對し、斯かるグルを有する事が一層善良なる印象を與ふと云ふ考へより發明せられし純粹想像的人物なる事勿論て有る。偖てラーマサラナの死後は、一般サチマイの名に依りて知らるゝ、其寡婦の承け次ぐ所となつた。サチマイの死後は、其息子ラマ、ヅラルバルに依りて、又バルの後は其子息イシユワラバルに依りて其れ〴〵相承せられた、然も此派は創立當時に於ける如く、今尙相當に傳播して居る。

開祖ラーマサラナは、他の多くの宗祖の如く、非常に獨創的の人物て有つた。彼は其門徒より賽錢を收むる爲の口實として、自己は人間身體の所有主にして、靈魂が其身體を占領するを認容す、而して各人は此に對し相當の賃料を差し出す可き義務を有し、我は要求する權利を有すと云つた。斯くて彼は、自己の權利を一層强固ならしめ、且つ其宗徒に金錢上の興味を與ふる爲彼徒の中より執事又は代理者を任命し、以て收入所得を大いに修理する所有つた。婦人は多く此派の人に欺瞞せられ、其夫及び子女の永壽を安固にする爲、時に要求せらるゝ丈けの稅金を支拂はねばならぬ事が有る。斯くしてカータの代理者は、彼に身を委ぬる村落の寡婦、及び其子女無く友無き憐れの婦人等に對して、頗る親密なる語を以て接近する、而して此かる方法に依り、彼れの管轄區域內なる、總ての婦人信者の出席す可き祕密

大會合を開催し、其所て彼れは紇里濕那の役目を演ずるのて有る。

カータの代表者等は、毎年五月、彼等の家族住居に開かるゝ、朝の會合に於て一般會員に對し、賽錢の奉納を要求するものなるが、此時彼は實に驚く可き奇蹟を遂行するものて有る、即ちカータバジャの教師は、數分間に能く醫師醫藥の救治し能はざる天刑病、盲目、聾者、其他所有種類の難疾をも、直ちに治し能ふものとせらる。斯かる事に興味を有する大多數の人々が、終に信者たるに至るは理の見易き所で有る。予が今カータに依りて演せらるゝ奇蹟の經過に關する觀念を與へむとするは、ゴーシャバラに於いて開催せられし、朝の會合に出席せし一盲目者の經驗より知り得たる事實て有る。曰く、予は大群集中を押し分けて前に進み、カータの所に到りたり、予の周圍の隨伴者の一人は、不意に予の手を捕らへ、其境内なる池の傍らに連れ行きたり。其所にて、予を地上に横たへて強く抑へ、非常に激烈なる方法に依りて、兩眼の凹みを砂を以て磨擦しながら、彼等は時々予に問ふに、眼の視力の回復したるや否やを以てせり、然れども予は勿論、斯かる苦痛慘酷を脱する方法を知らざりしかば、終に答ふるに然りと云ふを以てせり。此所に於いて、彼等は村中に響き渡る大聲を振り上げて、サチ、マイ、キ、ジワイと叫べり。此れに續きて、池中に入れて水浴を爲さしめ、兩眼の砂を洗ひ去り、而して新調せるDhooti なる下衣を着せしめ、恰も羅馬の古凱旋式の如き事を行へり、而して彼等は予を空中高く差し上げて、群集中を通過し、其間絶えず大聲を發して、サチ、マイ、キ、ジワイと叫びつゝ行き過ぎたり、但し此語は『盲目者はサチマイの惠みに依りて今眼を開きたり』と云ふ意味を有す。斯くして、彼等は其廣告を終り、偖て此事に關して如何なる巡禮者と雖、個人的には何等の質問探求をも不可能たらしむる如き方法手段に依りて、其村落より追放せられたり云々。

抑もカータバージャは、特種の標章を有せず、又自派の神聖なる文學若しくは經典を有せぬ、而して更に殿堂と乞食僧とを有せざるは頗る奇て有る。其最初入派の形式は、『精神的教師こそ、唯其れ眞實の存在者なれ』と云ふ事丈けて有る、即ちThe spiritual teacher alone has real existence,, の意味て有る。此新發智が、充分精神的に進歩せし時は、更に教師は他の咒語を、彼れの耳近く、小聲にて授くる、即ち次ぎの如きものてある。

『大いなる主、アウリアは萬物の頭に在り、予は主の歡喜の儘に從ひて運動す、予は一瞬だも主より離れて生活する能はず。嗚呼大いなる神よ、主よ、予は常に汝と共に在り……』

熱心の發現は、カータバジャの實行せし宗教的訓練の唯一形式で有る、從ひて彼等は總て神及び女神を崇拜せぬ。唯其祕密集會に際して、アウリアゴッサイン、紇里濕那等に關する歌を歌ふ、而して其會員中の或者は、夢中に成り、殆ど失神卒倒する事が有る。斯かる場合ひには、一同頗る氣遣ひて、直ちに蘇生せしむる爲、彼れの耳近くハリ(Hari)の名を繰返すを常とする。併し其實不適當なる家族たらしめむとするもの、其結果に至りては蓋し想像するに餘り有りと云て可い。

其二　ブラタプ、チャンデ派

(The pratap Chandi Sect)

ブラタプ、チャンデ派は、バードワンの不幸なる王、ブラタップチャンドの創立する所で有ると傳へられて居る。彼れは父王デジチャンドの最初の妻の唯一人の息子なりしが、幼時已に其母を失ひ、父王は其後ラン、カマール、ニマリと云ふ第二の妻を迎へた。ブラタプは、幼時よりバードワンを訪問し來る托鉢僧を好み、多くの時間を彼等の中に入りて費したと云ふので有る。彼の社會的階級はPanjbiなる刹帝利なりし故、彼れを丁寧に取扱ひし托鉢僧の間には、自らラホールの偵察者有りしは全く可能て有る。斯かる中にも、彼れは其父の經過せる種々の生活、及びラニカマールクマリの兄弟なるバラン氏の諸事務整頓の有樣を見て、痛く嫌厭するに至つた。斯くて此等諸種の事態は、身心を攻むるが如くに迫り、彼れをして殆ど堪えざらしむるに至り、加之、父デヂチャンドラは老年にも拘はらず、バランの娘と結婚せしかば、依て以て一層の憤怒を惹起し、父をして本心に立ち歸らしめむ爲、頗る大膽なる盡力を爲した。其後彼れは、バードワンの宮殿を出てて、カルナに退隱し、其所に暫時の假寓を定めたりしが、幾何も無く、病みて漸く重きを增すに至つた。

ブラタプの取りし斯かる生活行爲は、自己に對する父王の意の存する所を確め、或は父をしてラニカマールクマリ及び父王を敵とせし彼女の兄弟バラン等より來る、總ての事情を脫せしめ、以て自由の境に身を處せしめむとの企てに出てたる事明かて有る。斯くてデジチャンド大王は、カルナに於ける其皇子を見むとして、

事實バードワンの地を出發したりしかど、此間にラニ女及び其兄弟の密計奸策の施されし爲、大王は此行を前進せしむる能はず、終に中途王宮に引き返す事と成つた。王は其後ブラタブに對し、臨終の費用にもとて二十萬留比を贈りたりしが、此くの如きは偶々以て其子息の悲哀を一層强からしむるに過ぎなむだ。然るに一夜カルナに於いて、ブラタブの死が傳へられた、此時カルナのバギラチ河の岸は、遮蔽物に依りて全く閉鎖せられたりしが、火葬の柴の堆積は直ちに準備せられた。併し王子は、自己の爲に差し向けられたる小船に乘じて脱れ、直接ラホール市に行き、其後父王の訃を聞くに及びて其地を去れりと一般に信ぜられて居る。此より先き、バランは已にテジチャンド王より、一人の子息を得むと頻りに準備して居た、而してブラタブが不意にバードワンに歸着したる時、此實際の相續者たる王子を して、其宮殿に入らざらしめむと頗る力を盡す所有つた。此所に於いてブラタブは、カルナの地を得むと試みたりしが、一方バードワンの一組は、バランと其子息を助けて事を爲さしめ、而して新王と其部下が汽船中に熟睡せる間に、彼等は其敵軍の爲に不意に威嚇せられた事が有る。王の從者の多くは、敵の銃火に斃れ、王亦自ら身を以て水中に投じ、河を横切りて辛ふじて難を脱れた。彼れは其後逮捕せられ、直ちに謀叛の訴訟を受けて裁判庭に引き出されたるが、證據人中の善良なる人々は、彼れの爲に一致して辯護し、唯其れに反對したるはバランの關係者、若しくは僞誓者等一味のものゝみて有つた。併し前者の證明は、總て不信用に終り、彼れは終に六ヶ月の禁錮を宣告せられた。然るに彼れの出獄後は、一般人の偶像の如く尊ばれ、時しも自己の名義を有する一派を組織し得て、彌々宗教的運動を開始するに至つた。其主義としては、カータバジャの如く、秘密崇拜にして、特に一般人に注目せらるる事頗る稀れて有りしは自然て有る。併し其が一時急速に傳播せられしは、全く不思議な程で有ると云はれて居る。斯かれば其範圍實に其洲の奥の奥までも擴張せし狀態なりしが、今日と成りては殆ど其命無しと云て可い。

第四章　グル崇拜及び高地印度の不正諸派

其一　ヲウドのサトナミ派

ヲウドのサトナミ派は、西洋紀元前後に在りし刹帝利のジャクジヴンダの創立したる所なるが、彼れはサルジュ河の岸に於けるサルダハ村の住人なりしと云ふ。彼れの死は、今の阿輸陀耶及びラクノヲの間に在るコトワに於いて起つたと云はれて居る。彼れは普通諸派の開祖の如く、或教訓論篇を作り、世界と精神と一致する事など、全々心的指導を自己の職責として頗る主張する所有つた。彼れの後継者中には、家長及び乞食僧の兩種が有る、前者は社會的階級を認むれども、其僧に至りては他の印度教諸派の如く、他階級の者を以て其補欠を満たし、而も彼等を同一位置に居る可き者なりとした。サトナミ派の乞食僧、換言せば托鉢僧は、他人の戸外に立ちて食を乞はず、一般其派の信徒に依りて支持せらる、而して彼等は多數の僧庵を有し、其重なるものはコトワに有る。コトワには、今尚ジャグヂワンダの紀念塔有り、併しサトナミ僧院の本山の如き位置に相當するものは、サヘブ(Saheb)と稱せらるるもの此て有る。其劣等托鉢僧は、ダス即ちSlaveなる異名に依りて呼ばれ、其特別なる標章は赤き頭巾、孔を穿てるマンテル、及び灰又はShama Bindiの粘土を以て、鼻の尖より前額の上まで引かれたる垂直線て有る。

此宗教に屬する一般信者は、羅摩崇拜の儀式を擧行する事に依りて、入派を許さるゝ規定て有る。而してヲウドの此大英雄神に對する賞讃語の長き呪若しくは眞言の如きものを操り返す事を教へらる。乞食僧も亦此と同一なる眞言に依りて、入派式を行ふ、併し又彼等はベンゴールのバウルの如く、人體局部より分泌する液汁を飲む、所謂ガヤトリ、クリヤ(Gayatri Kriya)と稱する恐ろしき儀式をも實行するものて有る。偖て此派は、偶像を崇拜せず、僧侶は一般菜食者にして、又禁酒主義を守つて居る。

其二　バルタ、ダシ派

(The palta dasi Sect)

バルタ、ダシ派は、根本的には、上のサトナミ派と同一て有る。此派の重要なる殿

堂は、阿輸陀耶に有り。其托鉢僧は、黄色の衣服及び頭巾を被る。其中或者は、無制限に頭髪の房を發達せしめつゝ有れども、其半數は剃髪す。其相互挨拶の形式は、"Satyarāma"なる語を發する事にして、彼等の多くは阿輸陀耶、ラクノヲ及び尼波羅地方に住する。而して其儀式の重なるものは、又彼ガヤトリクリヤの實行に在り。最後に其開祖は、サトナミ派創立時代と畧同じく、バルタ、ダシの一人て有ると傳へられて居る。

其三　アッパ、パンチ (The appa panthi)

アッパ、パンタ派は、ムンナダスに依りて開かれたと云はれて居る。彼れの階級は鍛冶職に屬し、阿輸陀耶の西方なるマルワの地に住して居た。此宗徒は、實際精液(Semen)崇拜者にして、其服装はバルタダシと同一て有る。

其四　ビジャ、マージ及びマージ派 (The Bijamargis and Margis)

ビジャマージと、マージ派は、今重にカチワールに在り。此派の僧侶は、尼僧を伴ふものなるが、僧は此尼を印度教徒社會に於ける或男子の一員の如く排列し、以て謝禮金及び儀式の爲に拂はしむるものて有る。而して又實際、其妻に賣淫を勸むる事も有る、此はビジャマージ派の最も特別なる、又異常なる形式たる事勿論て有る。斯くて世には、虐殺、掠奪、飲酒、放蕩及び姦淫等を是認する、多くの宗教が有る。併し斯くの如く、自己の妻に淫を賣らしむる事を以て、神聖とするは、恐らく世界無比の現象にして、古往今來の一品たるものて有らう。加之此派は、其他恐る可き又汚れたる實修を行ふ。

第五章　ベンゴールの劣等グル崇拜派

其一　バラ、ハリ派 (The Bala Hari Sect)

バラハリ派は今より六十年以前、バラハリと稱する掃除役階級の一人に依りて開創せられしものて有る。彼れは其青年の時、地方の富豪ゼミンダールの家に雇

はれて番人たりしが、己れの義務を忽にせしと云ふを以て、甚だ惨酷に取扱はれ、終に其關係を絶つに至れり。其後數年間諸地方を漂泊したりしが、自ら宗教的教師と成り、忽ち二萬に過ぐる弟子を得るに至つた。彼れの儀式崇拜の重要なる容相は、彼れが其弟子に對して、婆羅門を欺待せよと教へたる其中に包含せられて居る。彼れは頗る無教育の人で有り、從ひて何事かを語り、何ものかを爭ふ時、常に一語兩義を含む戯言(Pun)を盛むに使用し、以て聽衆を驚かすの才を具へて居た。併し彼れの寡婦は、夫の位置のみならず、其全能力をも承け繼ぐ事出來なかつた、而して此寡婦は一八七二年頃生存して居た。バラハリの傳燈者は、其衣服、標章共に特種の規定が無い、而して其托鉢僧は、時に戸外に立ちて、人の食を乞ふ事有つた、即ち此時彼等は、一切神の名を唱へず、加之宗派の標章を着け居らざる故を以て、甚だ能く知られて居た。

其二　東ベンゴールのカリ、クマリ派

(The Kali Kumali)

予が今此所に語らむとする、東ベンゴールのカリ、クマリ派に關する記載は、教師ブラサッド、セン氏の"Introduction to the study of Hinduism"の中より得たるものて有る、即ち曰く、

『ダッカ州に於けるカリクマールタゴールは、宗教の中心と成り、絶えず公衆を動かしつゝ有り。彼れは、僅かに村落のカヤスタ階級の富有なる寡婦に對する(Gopt maslta)なる一般ベンゴール語を心得しのみなりき。されば彼は、ガヤトリの句以上に、吠陀に關して何事をも知らず、又富蘭那に就きては、ベンゴールの婆羅門以上に出づる能はず、彼Bhadraloyは彼自ら根本的に研究したるに非ざる事勿論にして、唯他人の暗誦に依りて知り得たるのみ。偖て又彼れの生涯に關しても、其職業の方法として何等特種の神聖をも示さず、而も尚彼れが世に知らるるに至りし所以は、蓋し難治の疾患を救ひしと云ふ事實に歸す可し。斯くして、彼れは忽ち其名聲を高くし、人々は洲の各部より日々彼れの許に群集し、或は病ひの救治を乞ひ、或は生きたる神を見むとせり。此點に就き、彼れが頗る成功したりと云はるる處方は、唯、一日中三回水浴せしめ、カリクマールタゴールの神聖を充分に信ぜしめ、且つ其耶内の土の一塊を取りて、ハリルートを與ふるに過ぎざるなり。然るに、或時役所

より、カリクマールがゴマシユタとしての或行爲と關連して、逮捕狀發せらるるに至りしが、其執行前終に彼れは死したり。斯くて彼れの宗教は、彼れと共に死滅したりしかど、其門徒は一時十萬を以て算せられたり云云。

第六編　印度教徒と回々教徒との混合宗教

第一章　カビルパンチ (The Kabir Panthis)

回々教徒は、紀元十三世紀中に、印度に於いて其帝國を設立した、而して其後二百年以内に於いて、諸派を組織播布し、以て支配者及び被支配者の公言せし信條の間に存する調停鎔解を表する明かなる目的を實行せむとした。併し其試みられし經驗は、甚だ不成功に終りたりしが、其一般道德に對しては、實に大いなる影響を與へた、而して彼徒は印度教徒と、回々教徒との間の不和惡感を溫め、以て其可能なりし一致調和を一層强固ならしめむと計る所有つた。此一大江を越へて、架橋せむと企てし貴族的教師は、第十五世紀末に生存せし、カビールなる下等階級の詩人に依りて、先づ其先鋒を得、指導せられた。彼チヤイタニヤは、回々教徒が其弟子として自派に入るを許した、併し彼れが教へし羅陀信仰の宗教は、アラビア豫言者の純粹なる一神教と共通なる一點を有せざりき。カビールは、或新規なる立脚地を造

り、以て印回二教をして其根原的信條の基礎的崇拜より、互に分離する事無く、手を握り乍ら會合せしめむ事を要求し、此れに向ひて頗る努力する所有つた。

カビルは、一般 Johaha 卽ち回々教徒の織布職なりとせらる。彼れの回々教徒相續者等は、彼れが回々教徒たりしを云ふと雖も、印度人の史家に從へば、彼れは婆羅門族寡婦の一子なりしが、其母の捨つる所となり、後ジョラハ職の人に救はれ、養育せられたと云ふ。彼れは又羅摩難陀の弟子たりしとせらるるが、事實其信仰は羅摩崇拜の形式を有するもので有つた。而して勿論印度教徒の入派を許し、印度教徒及び回々教徒の信仰、幷に實修に關して、甚だ大膽なる批評を試みた。彼れは羅摩の名稱の下に、上帝の讃嘆を推奬し。其傳燈者は、一般最勝の神として羅摩を崇拜し。其僧侶はカビルの精神を渴仰するに至つた。此派の僧は、一般門徒に教典を與へない。而して門徒は Dandpat 又は Bandgi 若しくは Ram Ram と云ひつつ僧侶に挨拶する。殊に精神的長老職に在る人は、此れに對して Gurn Kidaya なる語を以て答禮す、蓋し其意味は『教師なる予の悲慈』となるので有る。

カビルの門衆は、特殊の法服を用ひない、偶々ラーマートの如く羅勤の玉の首飾りを着くるもの有れども、此れ決して此派に必然なる標章では無い。カビール自身は、頗る論事家にて在りしかど、其門徒に對しては論議を避けしむる爲、僞善虛飾の實行を勸めた、彼れは其門徒に向ひて曰く、

"Shab se hiliye Shab se hiliye shab ka liliye nam Ham ji Ham ji Shab se Kiliye wosa apna gam"

"Associate and mix with all and take the names of all; Say to every one, yes sir, yes, sir, Abide in your own abode."

『總てのものを結合し混合せよ、而して如何なるものゝ名をも拒む勿れ。誰れ人にも然り足下よと云ふ可し。汝は自分の住所に在れ。』

中央及び西部印度の劣等階級人民の大多數は、カビールの門徒に屬し、ベンゴール及び南方印度には、此の派の人甚だ少數て有る。併し印度の市、到る所地方土語に譯せられたるカビールの歌を歌ひて、巡遊する乞食が有る、又以て盛むなりと云ふ可きて有る。

第二章　シク信仰の歴史

其一　最初のシク教師……ナナック、

シクの宗教は又カビルの其れの如く、印度教徒と回々教徒との間を、結合せむとして起れるものなるが、其結果は最初の所期と甚だ異るものて有つた。抑もシク宗教の創設者ナナック(Nanak)はカビル、チャイタニア、バラワ阿闍梨、偖ては彼の西國のマルチンルーテル等と同時代に起つた人て有る、而して彼れは恐らく、カビルの門徒なりしと考へらるゝが、兎に角此大詩人及び道德教師の倫理學、神學はナナックの精神に深き印象を與へたやうて有る。彼れが最初企圖せる告白は、勿論印度教徒と回々教徒とを平和に保たしめむとの希望を、事實表現する事に在りしが、不幸其は水泡に歸した、卽ち彼回々教徒は、精神的平和運動より、刀劍の手段に依りて、彼等の宗教を播布する事の一層可にして、賢なるを信じたからて有る。

ナナクはベヂ族の剎帝利にして、父カルーはラホールの北六十哩のチルワンヂ村の地方官たりしが、ナナクの生れしは其地て無かつた、則ち懷姙せる母は、長き以前よりの一般習慣に從ひ、其實家に一時引取られた。而して此最初のシク教師誕生地たる名譽は、終に其母の祖父の住地なるコット、カチャワに近き、マル村の負ふ所と成つた。斯くて、マル村に生れしナナクは、未だ少年の時結婚したるが、父は彼れに勸るに、或種の職業に就かむ事を以てした。併し彼れは元より宗教的教師の位置に對して、不可抵抗の希望を懷きたりし故に、父の諫言は云ふに及ばず、ナナクに侍つ所有りし、其家庭の幸福も終に彼れの曲げられたる一線より、止めも敢へなむだのて有る。彼れは、多くの場所を旅行せしが、メッカを訪問したるは、重なる事實て有る。

偖てナナクの宗教は、一言に盡すを得可し、卽ち印度化せられたる回々教、又は回々教化せられたる印度教、此れて有る、從いて彼れは回々教徒の傳導を認め、彼れ自らアラビア豫言者の後繼者と考へた。然るに一方印度教の諸天神をも、決して否定せぬ、唯其崇拜をして盛むならしめざらむ事を、僅かに欲したる耳て有る。ナナクはマホメットの如く、無上唯一神を信仰したる事勿論なるが、今此れに關して彼れの見解を見るに、次ぎの叙述は蓋し其眞面目を傳ふるものて有らう。

十萬のマホメット。梵及び比濕奴の一萬。十萬の羅摩は、最高の門に立てども此等は總て消滅す。神のみ獨り永久不死なり。而も其神の讃嘆に組みし、又其を信仰する人々は、尙相互に爭鬪し、敢て耻ぢとせず。げに眞實、誠の心を有し、僞り無き人のみ、唯其れ眞の印度教徒なり。而して清く汚れ無き人のみ、獨り回々教徒なり。』

彼れは、彼れ以前に住せし他の豫言者に關し、其宣傳の說を通してのみ信じ得た而して門徒に向ひ、其等を信ずる事を命じた、即ち曰く

『一時ナナクは上天より漏れ來るナナクよ來れ』の叫びを聞き、答ふるに『オー神よ、予は神のみ前に於いて立つ可き力有るか』を以てしたり。上天の聲は『汝の眼を閉ぢよ』と命せり、ナナクは其命に從ひて、彼れの兩眼を閉ぢ前に進み出てたり。更に彼れは、上天の命にかしこみて上方を仰ぎ見たり。此時五度 "Wa" 即ち『能く爲したり』と操返され、次ぎに "Wa; Gyruji" 即ち『教師よ能く爲したり』と發せられたり。神此時改めて宣はく『ナナクよ、神は汝をカリユガー五濁惡世の世界に送らむとす、行け而して神の名を保持せよ』と。此所に於いてナナクは曰く『オー神よ上帝よ、予れは如何にして此の大いなる荷物を背負ふ可きか、たとひ予れ幾千萬年の壽命を保ち、不死の妙藥を飲みたらむとも、偖ては予の兩眼の日月より成りて決して閉づる事無からむとも。尙大いなる神よ、予は上帝の名を保つに堪えざりしならむ』と。神更に宣はく『教師よ、神は汝のグルたる可し、汝は人類のグルたる可し、汝の派は世界中大いなるものにして、汝の語は、Puri Puri なり。而してバイラージの語は、Ram Ram。サンヤシイの語は Om nama narayan なり。而して瑜伽者の語は、Ades Ades。回々教徒の挨拶は、Saram alikum。印度教徒は、Ram Ram なり。されど汝の派の語は、Guru ならむ。而して神は汝の弟子の罪を宥恕す可し。バイラージの崇拜の場所は、Ram sala と呼び。伽瑜者の其れは、Asan。サンヤシイは、Mat なり。然れども汝の種族の崇拜所は、Dharma sila なり。汝は其後繼者に對し、三條の教訓を傳へざる可らず、即ち第一に神の名、第二に博愛慈善、第三に洗淨なりとす。汝の後繼者は、世界を放棄す可らず、全存在物に疾病を得しむる勿れ、如何とならば神は總ての物に呼吸を與へたればなり、而して神の總ては汝なり、如何とならば神と汝の間には決して差異無く、同一なればなり。汝の、カリユガの世に

送らるるは、祝福す可きなり』と。終りに、最高のグル卽ち神の口より"Wa Guru"は發せられ、而してナナクは來りて、宇宙に光りと自由とを與へたり。』

斯くの如くにして、ナナクはマホメットの如く、基督の如く、最高發現たることを宣した。唯其異れる點は、基督は彼自ら神の子なりと云ひ、マホメットは唯一存在者の代理、若しくは使者たる事を門徒に信ぜしめ、ナナクは印回二敎に對し、共に此れを知らしむるの關係を定めた。ナナクは自ら宣して、予はグルの代りに大御神を有するの光榮を荷負へり、予は人類の敎師として、神の命を受けしものなりと云つた。彼れは、此態度を持して、其根原たるを證したるのみならず、其國民の中心弦を打ち、果して彼等の尊重と影響とを安固にした。弟子は、必ずしもグルの全ての權力を有するを要せぬ。此所に於いてナナクは、如上傳說中に、神と、神の命じたるグルとの間に、更に障壁を立てず、而して其を神に歸する事に注意した。

斯くてナナクは、敎師卽ちグルの名稱を取りし故、其門弟等は自らSikhと呼ぶに至つた。此シクなる名目は、梵語のSishyaなる語の廢形にして、弟子を意味するもので有る。彼れは生存當時より、早く已に多くの門徒を吸收した、其中にマーダナなる回々敎徒出身の人有り、又二人のシク敎師中、一人はブータ、他の一人はレーナと云ひ、頗る高貴の人有りたるが、前者はジャト、後者はチハン階級の刹帝利種に屬した。ナナクは自己の子息に關せず、レーナを任命して其承繼者と爲し、與ふるに第二のシク敎師、卽ちAngatなる名稱を付した。而して彼は紀元一五三九年、ラビ河の岸なるキルチブールに死したるが、今此村落には、たとひ洪水の爲に押し流されて、其墓石を止めずと雖、尙且つシク巡禮の重要なる地點と成つて居た。彼れは、ラッチャミダス及びシュリーチャンドなる二子を有した。彼有名なるババ、ゲーム、シングは、其の末裔で有ると云はれて居る。

一般門徒に對するナナクの敎說は、"Adi Granth"卽ち"First holy book"中に示さる。而して經典の第二部分は"Dasam Padsha Ki Granth"卽ち"Book of the Tenth King"と稱せられ、シクの最後にして、又第十の長老、ゴビンダグルに依て作られたものて有る。其第一聖書は、ムニチのツラムブ敎授已に之れを英譯した。抑もマホメットは、人の知る如く、戰爭强奪等の行爲を爲したる宗敎家なれば、今ナナクが、彼れ自ら平和の使者としての機能を振舞ふは、最も至當の事にして、此點已に充分幸

福て有つたと云て可い。總て生物の生命は、彼の眼に神聖なるものとして映じた。全能の神に依りて附與せられたる呼吸は、唯神のみに依り、而して人の能く取り去る可きものに非ずとし、而して殺戮及び爭鬪を包含する戰爭を、公然非難するに至つた。併し、予は此れより進みて、次に來る可き時期中に於いて、シクが如何に此主義と、正反對の教說と實行とを採用するに至れるかを、一瞥せむと欲するので有る。

其二　シク教師のアンガート

予は已にナナクが自己の子息を差置きて、其弟子の一人を任用し、アンガートなる名稱を與へ、以て自己の紹繼者と爲したる事を陳べた。此所に於いてアンガートは、自然其子息の嫌忌する所と成りしかば、止む無くビース河岸なるクヅールに移轉した。彼れは其所にアマールダスと稱する唯一人の從者と共に、頗る音無く香無く、不明朦朧に住みたりしが、一五五二年終に逝去したと云ふ。

其三　シク教師のアマールダス

アンガートは、其子無かりし故に、從者アマールダス其後を繼いだ。彼れは、バーレ階級の刹帝利にして、生前多くの弟子を得ゴビンダワルの生地に住みたりしが注意する程の活動無くして、一五七五年逝去した。

其四　シク教師のラーマダス

第四のシク教師に當れるラーマダスは、アマールダスの養嗣子て有る。而してラーマダス及び其後董者等は、ソデの階級に屬す。彼れはアクバル大帝より、自由保有不動產の土地讓與を受けたりしが、其地には、今アムリッアールなる有名なる市街有りて、其建設以來シク宗教の首府と成つた。ラーマダスが、大王の厚意により て得たる政治的身分は、實際大王領域よりも、遙かに大なるもので有つた、從ひて彼れがアクバル帝國に於いて甚だ高き位置に在るを知らるゝや、地方貴族の多くは、自ら其門弟として加入するに至つた。

其五　シク教師のアルジユーン

ラーマダスは、一五八二年に死し、末子アルジユーン、其後を紹いだ。而して以上、

のシク派四祖は、何れもフワキール卽ち乞食の如き服裝を爲したりと雖、五祖アルジューンに至りては、獨り高價なる衣裳を纏ひ、常に美はしき多くの馬をも所有して居た。彼れはアムリツアールに移轉して、自己の住宅を新築し、尙ほシクの重要なる神殿として、今日に殘存せる大伽藍を、其地の沼澤中に建設した。"Adi Granth" 卽ちシク敎の舊譯全書は、ナナクに始まりてアルジューンに終り、其全部は後者に依りて創立せられたる殿堂中に藏せらる。アルジューンは、敎師として、同一階級の一員たりしチャンダサーと稱する、ラホールの印度敎官吏の、脅迫的刑罰を避ける爲に、自ら溺死した、卽ちアルジューンは彼れより提議せし結婚同盟を拒絕する事に依りて、痛く其憤怒を買ひたりと云ふ。

其六　シク敎師のハー、ゴヴインダ

ハー、ゴヴインダは、アルジューンの子息で有る、彼れは天性大將軍かるの資能を有し、恐らく常備軍(宗敎的の)を採用せし最初の人で有らう。當時、パンジャブ地方の支配者たりしシャーゼハンの長男ダラは、アクバル大王の如く、甚だ大度公平なる意見を有せる人なりしかば、最初ハー、ゴヴインダに對し、決して妨害又は困難を與ふる如き事無かりしや明かで有る。併し、此支配者に屬する從者等の、甚だ不正にして橫暴專擅の行爲は、終にハー、ゴヴインダをして、ダラを煽動し、自ら復讐せむ事を決心せしむるに至つた。然れども、其結果、遠征軍は、彼れに對して送られ、ゴヴインダは此官軍を打破し、若しくは擊退して成功したりしが、彼はモーガル王朝の、此際取る可き方略を、充分に知悉せる故、自ら退きてヒッサール洲なるバーチンダの森林に入り、暫時陰棲の生活を送るに至つた。然るに第二回の遠征軍は、彼れに對して送られたるが、第一回の如く忽ち追ひ還され、第三回の進擊亦等しく不成功に終つた。斯くて其後ハー、ゴヴインダは、ストレヂ河岸のヒラトプールと稱する山中に引退し、一六三九年其地に死したり。彼れは五子を有したりしが、其長子はハンラキなる一子を殘して、父の生存中に死した。シクの第九敎師、テグバハヂールは、ハーゴヴインダの第二子で有る。

其七　シク敎師のハーラヲ

ハーゴヴインダは其孫ハーラヲに依りて紹がれた。此グルは、デリイの回々王に對して、爭へるダラを助けたりと云ふ所以を以て、アウランゲゼブの忿怒を被りたるが、ア王は其帝國を設立するに當り、ハーラヲに脅迫的使者を送つたと云ふ。此所に於いて、彼れは其使者と共に、長子ラーマラヲを朝廷に遣はし、以て慰撫調停せむとした、曰く予は唯Fakirなる一乞食に過ぎず、從ひて唯一の目的は、陛下の光榮を祈るに在りと。

其八　シク教師のハー、キセン

ハーラヲは、紀元一六六六年に死し、其末子ハーキセンは其後を紹いだ。當時、ハーラヲの長男ラーマラヲは、デリイに在りたりしが、其相續權を除外せられたるを聞きて、直ちに訴訴を提起し、以て自己の正當權利を回復し、且つ其宗派の法律上のグルたる事を認めしめむと企てた。此所に於いて、アウランゲゼブ帝は、ハーキセンを召喚し、ラーマラヲの要求せし訴訴の原因を質さむとしたるが、彼れは王命に應じて、デリイに趣く途中、梅毒の爲に死した。時に紀元一六六六年の事て有つた。

ラーマラヲは、ハーキセンの死に依り利益を得る事更に無かつた。即ち此機に望みて、シク等はハーゴヴインダの第二子テグバハヴールを選びて教師とした。此所に於て、ラーマラヲは再び落膽する事甚だしきもの有りき。偖てテグバハヴールは、バカラに住し、多數の門徒を集めたるが、其教師と成るもの殆ど前代未曾有の多數に達したと云ふ。併し、彼れは、其家族の人々と善からず、一門徒の注意に從ひて、デリイに移轉し、其所に永久の住地を定めむとしたるが、果して此宗教的教師は、首府に於いて、好むが儘の位置を與へられた。されど世事總て塞翁が馬の譬へにて、彼れの親族なるラーマラヲは、尙ほ此帝國の朝廷に在りて、皇帝の心を教唆し、依りて以て彼れに害を加へむと、私に企てつゝ有つた。此所に於いて、皇帝は、其狡策を知り、バハヴールをして平和のうちに、デリイの地を去らしめた。彼れは心ならずも目的地を去り、西方印度に漂泊する事久しく、終にバトナ市に來りて、長く住する事に爲つた。グルゴヴインダは、バトナに生れた。テグバハヴールは、其後家族と共に

其九　シク教師のテグバハヴール

再びデリイに歸りたりしが、ラーマラヲは、彼れの其地に到着するを聞くや、忽ち又妨害を加へむと企つる所有つた。皇帝は、彼れに對して被らされし責任否其罪責を問はむとして、テグバハヅールを朝廷に召し出した。彼れは驚きつゝも、召喚に應じ參殿したるが、其結果再びデリイを去り、グールール王の領内なる、マクワルに至りて、暫時の陰栖を定むる事にした。ラーマラヲは、彼れの住所を知るや、直ちにデリイ王朝に呼び出さしめむと謀りたるが、モーガル大王朝の公命を拒む事の頗る危險なるを知れるテグバハヅールは、此時既に決心の臍を固め、偖て其一子を膝近く呼び寄せて、云ひけらく『予の息よ、彼等は予の生命を絶たむとして、今使者を送れり。併し我子よ、我れたとへ殺害せらるゝも、決して其死を痛み悲む勿れ、汝は予の後を繼ぎ、誓つて予の血を復讐せよ』と。斯く最後の數語を遺して、彼れはマクワルを出發した。グルは、デリイに着するや直ちに獄に投ぜられたるが、其後暫時にして、皇帝の面前に呼び出された、此時大帝アウランゲゼブは、一見彼れに對し、何の害をも加ふる事無かりし如くなれども、如何にしけん、大帝は平日の如くならずして、頓に弱き心の起り、此事件に關する一切をラーマラヲに一任する事とした。此所に於いてラーマラヲは、玉座の前に於いて、大伯父テグバハヅールの、說明を要求した。此れより先きグルは、實際刑罰に處せらるゝ如き事無しと見えたりしが、ラーマラヲはグルの辯解せむとする所を述べしめむ爲に、召喚を固く主張したので有るから終にグルの首の周圍に紙片を纏ひ、偖て對手に、劍を以て同一の者を切れよと請求した。斯くの如きは實にラーマラヲの要求せし所にして、刑の執行者は、命ぜらるゝ儘、一擊の下に紙を切らずして、彼れの首を切り落した。噫『予は予の首を與ふ、然れども祕密を與へず』てふ印度語の簡單なる句は、如何に讀まるゝて有らう。アウランゲゼブは、一般史家に依り、甚だ慘酷なる行爲者として、非難せらる、併し帝の斯かる行爲を奬助せし方法を考ふれば、此帝國に於ける宗教的頑迷固執と云ふよりも、寧ろラーマラヲの惡意怨恨に歸するを正當なりとす可きて有る。

其十　シク教師のゴ并ンダ

ゴキンダは、テグバハヅールの繼紹者て有る。彼は、既に父の爲に、其復讐を誓ひたれば、絶へず、其身邊に同一信仰の徒を集むる事を忘れざりき。從ひて使者は、マク

ワルの地に忠實なるものを招致する爲に、パンジャブ各方面に送られしかば、半ば奇を好み、半ば同情を有する群集は、直ちに各地方よりグルの市街に入り込む事、續々て有つた。此所に於いて、ゴヴンダは、或時其大衆の眞中に立ちて告げて曰く

予の父、テグバハヴールは、予に命ずるに彼れの血を復讐す可きを以てしたり、而して此目的に依りて、予は大軍團を招ぎたり、されど此は支持するに自ら資財を要す。汝等予の友よ、各人は予の命に從はざる可らず、而して其資を献せざる可らず。

次に各員は、一心同體と成り、同一手段と、同一宗教の信仰を奉せざる可らず。又各員の間には、印度教國民に存する如き、何等階級有る可らず。嗚呼、實に諸氏は一視平等、異體同心ならざる可らず。各員は、印度教徒の宗教書なるシャーストラの中に、其信仰を置く勿れ。汝等ガンジス河岸、及びブドリーナートの如き宗教的崇拜の場所を訪問するを誡しめよ、而して彼等の諸神に尊敬を拂ふ勿れ。諸員、其れ、グルナナクの外、何者をも尊重す可らず。故に、印度教國民の四種姓は、又排除す可きものなり。

以上の結論の告白を聞きて、大衆中に在る婆羅門、及び刹帝利の徒は、彼等の指導者として、教師ナナク、又は他の何たるグルをも認容せざる可しと公然發表する所有つた、此所に於いて彼等は穩當に分散するを許されたが、併し群集の大多數なる劣等階級の徒は、グルの主義を好むて奉ぜむ事を誓つた。ゴヴンダは、其翌日更に群集を集め、シク派の洗禮の儀式に依りて、彼等を形式的に入派せしめた、此儀式は Amrita Diksha と呼ばるゝ者にして、此時始めて發明し、使用せられ alooldi, 若しくは たものて有る。吾人は、次の章に於いて、此儀式の性質に關し述ぶる所有らむ。偖てゴンヴダは、以上陳述せし方法に依りて得し軍隊と共に、地方の重要なる領地内の、或地點を征服せむ目的を以て、前進し、最初先づ相當効果を收むる所有つた。併し地方民は、帝王に向ひて援助を求めしかば、ラホール及びサーヒンドの官吏は、王命に依り、適當の保護を、彼等に與ふる事と成つた。此所に於いて官軍は、王の軍隊と結合し、ゴヴンダに對向して進軍し、終に其本陣地なるマクワル城を圍むに至つた。斯くなりては、ゴヴンダは全く其目的到達の光明を失ひ、門徒の多くは分散し、僅かに殘れる忠實なる部下と共に、辛ふじて身を以て脱るゝを得た。彼れの不幸

と辛苦は、其後暫時繼續したるが、更に再び起つて軍隊を組織し、ムーガスチールに戰ひて、大いに官軍を惱ます所有つた。此時ゴヴィンダの本陣地とせし所は、乾燥せる沙漠の中に在りて、其所有に屬せし數個の池の外、一滴の水をも得られざりしが、此所に於いて官軍は、水に渴せる折りから、シク軍は急に此れを追擊し、終に其の主力を破滅せしむるに至つた。

ゴヴィンダの勝報は、實に猛火の如く四方に傳達せられ、風を望みて軍門に來り集まる者、日々殆ど其數を盡す能はざりき。アウラングゼブ王は、ゴヴィンダに對して送りし遠征軍の、斯く不利に歸せしを聞き、直ちに使者を派してゴヴィンダを呼び、斯かる行爲に對する充分なる辯解有らしめんとした。然るにグルは、此大帝王よりの使者に對し、非常なる敬意を拂ひしのみならず又大いに謙遜の德を表し、且つ波斯人に型を取りて、彼れの禍患を詩作に依り陳述し、以て帝王の惡感を和解せむとした。時しも、アウラングゼブは、マラタ諸州の統治に就きて、大いに困難を感じつつありしかば、他の印度教國臣民の階級を刺激して、一層事件を繁雜に導くが如きは、好まざる所で有つた。斯かる理由に基くか、或は曾ての處置が不正なりし故に、此れにて兎も角滿足したるものなるか、何れにしても、大王は、グルを召喚す可き嚴命を取り消し、更に改めてゴヴィンダを其宮廷に招待する事とした。教師ゴヴィンダは暫時躊躇したる後、モーガル大帝と會見を遂ぐ可く、南方に向ひて前進したるが、彼がデッカンに至らむとする途次、アウラングゼブ大王は、デリイの地に死した。併しグルは、其朝廷に參じ、大王の息バハヴール、シャーの歎待を受け、五千人の主長として、モーガル王朝に仕へむ事を勸誘せられた。其後ゴヴィンダは、或は平和に餘生を送りたらむも、其最初の目的は、終に何等効果をも收むる事無くして止むだ。彼れの子息四人は、總て父に孝なる繼紹者たらむ事を誓ひたりしが、不幸マクワルの攻圍中、悲歎の最後を遂げた。此所に於いて、ゴヴィンダは、此世に賴寄る一線の紐だに絶えて、生涯は痛く寂れ果て、疲勞頗る大なるもの有りしが、終に我れと我身を殺さむと企つるに至つた。彼れが、爭鬪中に殺害せし人の一子は、彼れを殺す事に依り、父の仇を報ひむとして、事露見に及び、終にゴヴィンダの許に呼び出されたるが、意外にも此青年は、ゴヴィンダより甚だ深切なる取扱ひを受け、終に其復讐を思ひ止まるに至つた。併し青年は其父の死に關せず、性來頗る臆病者とし

て非難せられ、彼れのグルの痛激を極めたる罵詈的刺激に依り、漸く思ひを返し、最後にゴヴインダに對し、致死の負傷を與へたりと云はる。ゴヴインダは、一七〇八年ニザムの領内なるナンドサーの地に逝去した。

第十一　ゴヴインダの紹繼者バンダ

ゴヴインダの子は、已に死したりしが、彼れは其相續者を、グルとして形式的に任命せし人は無かつた、故にグルの名稱は、ゴヴインダに止まる事と成る。併し彼れは、其生前弟子バンダに命ずるに、彼れの父及び祖父の仇を報ゆる事を以てした。バンダは、浮世と全く關係せざる宗教的修行者なる、所謂ビラージなれども、亦頗る野心に富める人なれば、今此グルの臨終の教訓を聞きて、心情直ちに燃え上り、果して其機と手段を逸せずして、大いに企圖する所有つた。彼れの目的は、バンジャブの征服、及び支配權を得るに在つた、而して其運動は、グル、ゴヴインダが、マクワルの鐵牢中に閉鎖せられし時、彼れの二子が慘酷なる殺害を被りし、サービンドの攻圍及び破壞に依りて幕を開いた。彼れは、先づサービンドに放火し、男女老若に抱はらず、全住民を虐殺した。此所に於いて、シク教徒の刺激は、頗る甚だしく、境漸く進みて又退く能はず、バンダはストレッヂ河を横斷し、到る所火を放ち、劍を振つた。彼れは、ワッタ、ラ市を破壞し、ラホールに前進して、其地を燒き拂ひ、掠奪を極め、全住民を殺戮した。斯くして、ビレージは更にラビ河を横切り、ジャムムの方向に進擊した。フエロクセール皇帝は、斯く血に渴せる狂者に依りて爲されし暴動と、其廢滅を聞くや、直ちに部下最良の將軍アブヅール、サマットを任命し、以てバンジャブの支配者と成した。此所に於いて、バンジャブに到達したる將軍は、甚だ接近せる陣形に依りてバンダを追ひ拂ひ、痛く擊破する所有つた。流石に猛きシク軍の指揮者も、此所に至りて施すに術無く、暫時は丘塞に身を寄せたりしが、更に將軍の爲に包圍する所と成り、終に捕虜の身と成つた。斯くてバンダは其後入牢者として、デリイに召喚せられたるが、最初其所にて、彼れの眼に映じたるものは、其同僚七百四十人の死刑被執行者にして、彼れは唯徒らに其衰頽の身を提げて、之を傍聽する止むを得ざりしに至りては、宗教的英雄の末路又思ふ可しして有る。此同寮七百餘名と云ふは、訓練甚だ堅く、其死に望みて一人の恐るゝ者無かりしと云ふ。此の

悲劇は、此所に最後の幕を垂れ、バンダの一子は政府の命に依り、父の手に斃れ、其膝に枕して此世を去れりと云ふ。悲痛も亦甚だしい。且つや、政府の官吏は、バンダに命ずるに、一語を發せずして此事を行ふ可きを以てした、加之、死後其臓腑を取り出され、バンダの顔を目がけて投げ付けられた。バンダは、此時已に自ら悲慘の苛責を極め、終に彼れの肉は、紅に熱せる釘抜きを以て、散々に破滅せらるゝに至つた。斯くて、デリイに於けるバンダ、及び其部下の野蠻的殺戮、バンジャブに於けるアブヅール、サマッドの採用せし强固なる手段方法等は、暫時シク派を撲滅したりしかの狀態で有つた。

アブヅール、サマッドは、マホメッドシャーの治世中に死し、其子ヅキーラ、カーンは、其後を襲ひたるが、頗る意志薄弱の支配者たりしと云ふ。彼の支配中、同々教徒に對する歸依を放棄せる、バンヂャブの土豪ゼミンダールは、彼等の收入を拂ふを拒み、以て小作人を壓迫した。此小作人と云ふは、大多數バンジャブのジャット、卽ち半軍人にして、其支配者なるDe jureの、不可能なる保護を得る爲に、シクの信仰を採用した。此時しも、アメッドシャー、ヅラニは、バンジャブの所有權を得むと企てたりしが、シクの徒は、大多數ラホール附近に集合し、アフガン將軍ゼハンカーンに對し大打擊を加へた。

ヅラニ王の死後間も無く、シクの主領等は、バンジャブの領域を、彼等の間に分割し、ジャムナ及インダス兩河の間に擴がれる全土を支配し、以て聯合政府を設立するに至つた。斯く獨立せる諸君侯は、ミサルと稱せられ、暫時は大平の夢もて掩はれ、決して相互に衝突する事無かりしかど、斯くの如きは、存續を望む可くも無く、やがてバンジャブ全部は、有力なるランジットシンハの權力の下に統治せらるゝに至つた。

第三章　シク派の性質と其現狀

予は、此れより曩に、シク派宗教の、印度教及び回々教の結婚せるものなる事を述べた。抑も、彼教師ナナクの繼紹者は、マホメットの傳燈者の如く、理論的目的に對して、一神論者たる事を宣告して居る。併し事實に於いて、回々教徒は、確信す可き盟友として、將最高存在の使者として、豫言者をも尊崇する。然るに、シク派も亦同一

方法に依り、グルとしてナナク及び其後續者を敬ふ者て有る。然れども、優秀なる力に於ける信仰に關する限りに於いて、兩者間唯一の差異點とする所は、卽ちシクの徒は、印度教諸神の存在を認定し、回々教徒は、異教徒の上帝を、全々排斥する事實の中に存する。一般に云はゞ、シクは回々教―類狀截斷(Circumcision)卽ち陽皮又は陰唇を斷ち切る事、及び非屠牛者として陳述せらる可く、更に回々教徒十々々信仰の形式に於いて見らる可きもので有る。

外見よりするも、シクは短き股引きを着し、長き髭を貯へ、額を塗らず、珠の首飾りを用ひず、卽ち一見回々教徒の如くにして、全く印度教徒の容姿は無い。唯、最も異なる一點は、シク派が、手頸腕等に鐵環を着け居る事て有る。彼等の最も嚴格なる信仰に依れば、グルの繼紹者等は、斷食、巡禮又は印度教典の命ずる儀式等の遂行を排除する。然るに、事實シクの多くは、印度教徒の神聖視せる諸禮場を、訪問するのみならず、正統派の爲に述べられし諸儀式を實行する者が多い。シク派中に在る小數の婆羅門及び刹帝利は、最後の教師に依りて、斷ち切る事を命ぜられし、神聖なる彼絲を有するものすら有る。今やシクは、英國支配の下に、漸次其活力を失はむとし、所謂印度教信仰に合同せられつゝ有る事實は、注目す可きて有らう。

モーガル王朝の權力、日に傾かむとするや、帝國偏境の諸洲全部は、殆ど悉く無政府的暴動を惹起した。此時シクは、王朝諸官吏の與る能はざる保護をば、臣民に與へしのみならず、ラジプト貴族のみの占有たりし野心的行動を、ジャットの農民に對して公開したる故、依りて以てパンジャブ諸地方に勢力を有し、甚だ普般化するに至つた。靜かにして、工業的なりしジャットは、廣き原野の平安なる耕作者たりし限りに於いて、決して隣邦の事業及び其繁榮に關係する所無かりしが、シク掠奪者の暴舉、及び其無數の門徒等の奢侈淫佚なる生活を放棄せむと企て、益々自ら苦しむの狀態に至つた。

然れども、現時に於いては、掠奪的行動に依りて、資財政權等を得るは、全國を統治する Pax Britannica に對して全く不可能事と成り、從ひてシク宗教は、頓に其聲譽と吸引力とを失ふに至つた。此所に於いてか、シク派は、甚だ僅少なる末裔の間に在りて、今や毘濕奴派諸形式の一に變化せむとするが如き、誠に自然の事て有る。卽ち毘濕奴諸派は、太平無事の時代に於ける臣民の間に、成功連續する最良の機會を

有するものなる事、此れに依りて知る可きて有る。

印度のシク人口は、二萬に下らず、而して此等は多くジャット及チュラハ地方に有る。此派に少數の婆羅門及び刹帝利有り。シク教師は、社會的階級を全く打破せむと試みたりしが、其相續權に依りて、位置を高めらるゝ狀態の人々に對しては、此制度は勿論頗る貴重なる者て有つた。從ひて婆羅門及び刹帝利が、政治的便利有るにも拘はらず、シクの同盟より分離せむとせしは、決して怪しむ可き事て無い。シク教師の、此標準を熱心に守りし輩は、百姓種のジャット、商業種のロラ、及びチュラハと稱する市街掃除人等て有つた。此ジャットは、マラタ人の如く、戰爭本能的國民なりしが、其勇武の狂熱は、鐵の規則に依りて恐らく抑壓せられたやうて有る。併しラジプト人が回々教徒に顚覆せられ、更に回々教徒が自ら劒を揮ひて成功するには、餘りに薄弱と成りたる時、ジャットは南方に於けるマラタ人の如く、北方に於いて墓場に急ぐ、光榮有る一路の爲に、其有力なる指導者を要したのて有る。ジャットは、ラジプト人より輕視せられた、此れジャットが、進むてシク教師の支配下に服從し、『國王の子孫』の口實を支持せし、婆羅門の權威を拒斥せし動機の一と成つたものて有らう。而して商業階級のロラは、刹帝利に輕視せられ、其高き位置に達せむとする動機、亦ジャットに等しき者て有つた。斯くして、ジャット及びロラの兩者は、終にシク同朋友情の脊骨を形成した。而も掃除人たる劣等階級のチュラハ亦此れに前後して、自己の不潔汚穢なる職業を、放棄するの機會を與へられ、シンハの稱號を有する、貴重なる位置を得、以て新信仰に對し、頗る熱心なるものて有つた。彼等は、Pahuldi なる洗禮の儀式に依りて、シク派に入るを許されど、稍高き階級のシクは、彼等と同一位置に置かるゝを拒みたる結果、終にマザビ、シク (Mazabi Sikh) なる名稱の下に、新階級の一種を形成するに至つた。斯くて成立せしマザビのチュラハシクは、高等階級のシクと共に飲食するを許されぬ、且つやシク戰爭に當りて、彼等は頗る他と異り、甚だ無慈悲慘忍の行爲を敢てするが多い。

シク派は、特に規則立てる僧侶無く、又バハヲルデ或は Amrita Diksha と稱する洗禮の外、宗教的儀式を一切行はず、然も此洗禮すら、前九人の教師の間には未だ無く、第十グルなるゴヴインダに至り、始めて開始せられたのて有る。而して斯かる儀式は回印二教の何れにも發見する能はず、從ひて基督教々會堂の其れより導き出

せる事明かにして、式甚だ單純、又彼印度に見るが如き何等莊嚴をも伴はぬ。已に前陳の如く、シクは正しく僧侶を有せず、而して其唯一の儀式は、信者中の五人を選びて洗禮を行はしめ、以て入派の記しとするのて有る。即ち此洗禮に對し、候補者有る時は、已に入派せし地方の會員は、先づ會員の會合を催し、請求者の祈禱は、此衆會の面前に於いて行はる。若し彼等此要求者の入派を許さむと決定せば、砂糖の溶液を入れたる石のコップを、直ちに公衆の前に持ち出し、少くとも五人の長者、特に其所に出席して、二重の緣を有する劒を以て、其液中を攪き雜る規定で有る。此式終るや、其液の一部は、新發智の眼、耳及び頭部に撒き降らし、其他は會衆一般に分配せらる。抑も、シク派は、偶像を排斥す、併し同時に印度教徒が、諸神の偶像を崇拜すると同じく、Granth 即ち此派の聖書を崇拜する。サー、モニエル、ウヰリアム氏はアムリツァールの神殿に於ける、此バイブルに就きて、次の如く陳べて居る。

Granth は、事實此神殿に於ける神聖物にして、其は恰も眞實人格的存在を有する者の如く取り扱はる。毎朝、貴重なる錦襴を着せ、五萬留比の代價を以て、ランジットシンハの調製したりと云ふ寶玉の天蓋下に在る、王座に敬しく安置せらる。

終日、長き驅蠅器は、其上に動かされ、夜に至らば、甃道の向側なる湖水の端に移して、神聖なる室内の黄金の床上に安臥せられ、門に依りて不淨汚穢より避け、且つ保護せらるゝ者とす。

此神聖無二の教典は、生きたる人の如く取扱はれ、其の前にはカラ、ブラサッドと稱する Halwa の皿、獻供せらるゝ事が有る。此馳走のハルワ皿は、暫時供養せられた る後其時殿堂に參拜せし人々の間に分配せらる。此分配物は、善良にして忠實なる印度教徒すら、恭しく受くるもので有ると云ふ。(此れに依りてシクは、正統派信仰の會員より、印度教徒として取扱はれ居る事明かて有る。而して、又實際グル、ナナクの名は、北方印度の婆羅門正統派の多くに依りて、印度教諸神の名と共に祈願せらる)彼徒は、其崇拜對象物の前に、ハルワ皿の外、他の何物をも供へぬ。予は此れより、此聖書の内容に關し、左に少しく陳べて見る。

最初に一眞理のみ有り』
道に二つ有り……印度教徒の道と回々教徒の道と……されど主は唯一のみなるを知る可し』

總ての宇宙創造物は、主の御手に依りて生ぜられたり、而して總ての物は、又神に依りて消滅す可し』

オー、汝ハリよ、汝は獨り總ての內と外に在り。汝は心の奧秘をも知れり』

嗚呼、予の心は、ハリの名を、オー、ハリの名を囁けり。げに、ハリは愉快を招致し、總ての罪と、惡魔を亡し、貧と苦とを去るものなり』

汝は予れなり、予れは汝なり、其所に何の差異か有る。黃金と腕輪の如く、水と波との如く』

尊全なるグルに依りて、ハリの名は、予の心に深く刻まれたり。ハリは、予の愛するもの、予の王なり。若し其れ、予とハリとを、一緒に結合するもの有らば、予の生と命は、再び蘇生するなり』

汝は總ての場所に於いて、予の父たり、母たり、姆たり、而して大いなる保護者なり、予に於いて、何の恐怖悲哀か此れ有らむ。予は汝の慈悲に依りて、汝を知りたり、げに、汝は、予の支持者なり、予は汝を信ず。汝の無き所、其所には他の何者も無し、オー主よ、總ては汝の手遊びの場所なり』

主は、我親愛なる友なり。主は、父母、兄弟、姉妹より尙ほ我れに好し。オー神よ、汝の如き他の何者も無し』

宇宙の主と結合せられ、長き後此人體は得られたり。汝は、或時は岩と成りて、山と成りて、又鍋菜と成りて生れたり。八十四を、十萬重ねたる存在の中に、汝は彷彿したり。眞實のグルに依りて、保護せられたる人は、熱風に觸れず、グルは眞實の創造者なり』

グルに依りて保護せられよ、彼れはハリの誠の家と宮殿の中に在るを許さる。死は彼れを食ふ能はず』

予れは、不斷に自身のグルに對して犧牲たり』

予は、予の主に對して、犧牲と成れり。吠陀より、コーランの書より、全世界より、彼れは實に卓越せり。ナナクの王は明かに見らる』

總てのものを忘れて、唯一の存在に融和せよ、欺ける心を去りて、汝の身心を捧げよ』

以上陳述せし聖典の敎說及び感情は、卽ち各印度敎徒に對して、善きものなる事明

かて有る。グルに對し、門徒等自己の愛及び尊崇を安固にする、一句一語の善句佳語は、近代印度教の神聖なる文學に於ける一般特質て有る。

偖て、シク派の教師は、決して獨身生活及び乞丐を奬勵せぬ、却て結婚蓄財等は、人生必然なるものなりと宣言するに至つた。併しシクの狂信者は、アカリス(Akalis)卽ち危險の時に對する人々と稱せられ、多くは獨身生活を爲す。彼等は、一般ダルマサラと稱する、シク派殿堂内に住み、鐵の圓板を有する青きターバンに依りて、直ちに其れと知らるゝのて有る。彼等は嚴しき兇悍なれば、少しにても刺激し、或は怒らす事有らば、甚だ危險なるものとせられて居る。從ひてシク規則の充分に行はれし時に於いては、彼等は大放縱者として取扱はれ、寧ろ偶然の變事として、敬遠主義を取らるゝに至る。シク派の中には、ウダシ、ニルマイリ及ゴヴインダシヤヒ等の半シク派が有る。最初の二者は、ナナクの繼紹者にして、後の一派は、ゴヴインダの創立せし一派に附屬するものて有る。

シクは、教師ナナクの末裔及び教師ゴヴインダの家族の代表者等を、甚だ尊重する。併し此派には、元來の僧侶及び任命せられたる、何等宗教的職務者の權力をも

認めぬ、從ひて、ソーデ及びベデ等のバフールヂは、他のシクと同一方法にて執行せらる。シクの重要なる殿堂は、アムリツアール、バトナ、ナンダー、タラムタラ、ムーガスター、カーターブール及バシヂヤシヤー等に有る。此等の場所中、最初の者は、正しく『神酒の池』を意味す、卽ち此はタンクの位置を表するものにして、ナナクは此池の乾燥せし時、奇蹟的行爲に依りて、水を滿したと傳へられて居る。第四グルのアルジユーンは、其所に一院を建立して、シク派長老等の集合所に當てた。バトナは、グルゴヴインダの誕生地たるの故を以て、甚だ神聖なる市とせらる。ナンダーは、ゴヴインダの死せし、ニザム領地内の某地名て有る。アムリツアール洲に於るタラムタラは、癩病患者を救治すと信せらるゝ水の池有るに依り、シクの徒の神聖視する所て有る。ムーガスターは、フエロゼプール地方に在り、曾てゴヴインダが再び其勢力を回復したる有名なる戰爭地なるを以て、又能く知られて居る。バンジヤシヤーは、ラワルピンデイの附近にして、ナナクが奇蹟を行ひし場所として、甚だ神聖視せらる。例へば、彼れは岩石の間より、自由に水を湧出せしめた、此時、彼れの競爭者たりし一豫言者は、ナナク及び其弟子等に向ひて、小山を投げつけ、以て彼等

を破滅せむと企てたるが、ナナクは直ちに右手を延ばして容易く此れを支へたと云ふ。投げつけられたる小山は、斯かる傳説の眞理を證明するものとして、熱心なる信者に依り漸次缺き取らるゝ故、今其小山の周圍は指の跡に充ちて居る。

第七編　耆那教

第一章　耆那教と佛教との古代關係

予は已に、商人階級の宗教に關して陳ぶる所有つた。此れに依りて耆那教が、印度人間に於ける現時崇拜の最も重要なるものゝ一たる事明かで有る。此宗徒、今二萬と註せられ、印度社會に於ける豐富なる人々の信徒が多い、其創立一見頗る古代に屬し、佛教よりも尙古しとさへ云はれて居る。

佛教家の説に依らば、尼乾陀及びターチカを敵宗として記載し有るが、予の私見に依らば、此等の宗派は、次ぎの時代に於いて、ジャイナ教の標旗を揭げて表はれしもので有る。抑も、尼乾陀(Nirgranthas)は、其開創當時、文字に表はされたる經典を有せざりし理由に依りて、明かに此名を得るに至りしものにして、彼等は當時慘酷なる苦行を實修し、奇蹟の行ひを可能なるが如く假裝し、又一般動物に對する寬容溫情を有する事を宣言し、依りて以て世間公衆の尊重歸依を博したやうで有る。斯

くの如き彼等に對しては、記載せる經文、先づ不必要にして、縱其早き時代に於いて、充分學識有る教師有りて、崇拜傳說教義等を記載し得たりとするも、彼等は書典に依れる、盲目的信仰の奬勵を爲さむよりも、全教典の有利厚生を拒む方、一段の興味有りとしたるが如くに見える。されど、彼徒の成功は、終に速かに文學者を出すに至り、佛教徒の例に習ひて、宗規法典の編纂を成し、地所に始めて耆那の名稱を選擇するに至つた。　彼等は、決して其舊本源たる尼乾陀と同一なる事を拒非せず、從ひて耆那教典中には、著者自身及び其派を尼乾陀として記載せる所有るは、確かなる事實て有る。併し、今や此耆那なる語は、現世の束縛壓制を受けざる人々の稱號と成つた、卽ち自然に從へる主義を、其第一義諦とするもの此れて有る。此說は實に耆那の眞實自然の意義に依りて、舊名稱を用ゆる時は、近代經典の權威を不信用に導く恐れ有る事實に依りて、必然に起つたものて有る。

佛陀の時代に於いて、ターチカと稱せられし一派に關しては、唯タータンカラス(Tirthankaras)を崇拜する耆那教と、同一なるより起れる名稱なる事を注意すれば充分て有る。

耆那の宗教が、佛陀時代以前に成立したる事は、多くの事實に依りて證明せらるるて有らう。　彼等の信ずる祖師は、廿四人にして、此れをJinas若くはTirthankarasと稱する。　其中、少くとも最後の二人バレサナート(Paresanâth)、及びマハービラ(Mahâviva)又の名Vardha-mana は、歷史的人物て有る。　斯くて、耆那のカルパ劫波經典中には、クマ、ラパル(Kumara-pal)はアンヒルワラ、パタン(Anhilwara-Pataun)を發見し、マハービラの死後耆那歷一六六九年へム、チャンドラ(Hem Chandra)の弟子たる可しと云つた。他の證權に依らば、クマール、パルの改宗は、一一七四年頃に起り、而して最後の耆那は西歷紀元前已に五百年代に消えた事明かて有る。　此派の歷史家に從はゞ、マハービラは紀元前第六世紀に生存したる人て有る、併し其史家は遙か後代に屬する人たるのみならず、耆那教豫言者等の古代研究に興味を有する人て有るから、吾人は此れを以て、直ちに所依の說として首肯し難き事勿論て有る。　されど、此事項に關しては、佛教書典に依りて、或範圍迄は、確定せられ得ぬ事も無い。　抑も、耆那の神聖歷史に從へば、マハービラは、多くの弟子を有したりしが、其中にゴサラなる一人有りて、アジヴカ(Aji vakas)と稱する一分派を開創し、以て其主長と成つた。　而も此

派と開祖の名稱は、最古の佛教書典中に在るものと明かに一致して居る。

佛教徒の聖典には、彼等を呼ぶに屢々外道邪教の名稱を以てし、又ニガンタ、ナタプトラ(Nigantha nataputra)なる名稱を用ゆ、卽ち彼尼健陀子又は尼乾子は、當時市中を裸體の儘にて、往來せるものなるが、佛陀は其論議に於いて、彼徒を常に折伏したりと云ふは、眞に近きが如くて有る。耆那の經中に、又ナタプトラの名稱に依りて、マハービラを語る事多い。此所に於てか、吾人は、釋尊とマハービラとは、同時代に在りし事を知るに充分なりと云て可い。偖又耆那の經典に依らば、釋尊はマハービラの、多くの弟子中の一人なりと云ふ。併し、彼徒の所謂筌多摩は、婆羅門種姓にして、其生涯は釋尊の個人的歷史と、何等一致する事無しと雖、釋尊は自ら耆那(Jain)と呼ばれ、又一時彼ニグランタの如く、逡酷なる苦行の實修に依て、眞智を得むと求めたる事よりせば、マハービラの弟子と云も、思へぬ事も無い。何を以て云ふか、見よ耆那教の神聖なる經典中には、我等の釋迦牟尼は、時々第二十五佛陀、若しくは耆那として記載せられて居る、而して彼徒の云ふ所に依らば、マハービラは、第二十四祖にして、佛陀を根本的に其弟子として取扱ひ、新分派組織後、第二十五耆那と云ふに至つたやうて有る。

縱、耆那の徒が、尼乾陀及びターチカと同一に非ずとするも、兎に角、同一信仰の繼紹者たるは、又疑ふ可くも無い。此れより先き、吠陀の婆羅門は、肉を食ひ酒を飲み、甚だ奢侈放逸に流れて居た、尼乾陀の徒は、此所に於いて、憤然として蹶起し、其間何等調停和解をも容れざる方法を取りて、先づ婆羅門の非行に對し、反抗の旗を擧げたる、印度史中最初のものて有つた。彼徒は曰く、人は生物に對し、一視同仁ならざる可らず、一切の肉を食する事に向つて、嫌忌す可しと。斯くして尼乾陀は、苦行を實修し、福祉に到達せむとしたるが、耆那の徒、亦同一方法を撰むて居る。而して尼乾陀は、衣服無く、裸體の儘にて諸方を徘徊した、此れ彼等の名が、已に裸體苦行者、若くは露形外道たる事を示すに依りても知る事が出來る。併し、古代に於いて、彼徒が、如何なる神と聖人とを崇拜せしかに至りては、今此れを知る事出來ない。唯、其以前に於ける、尼乾陀的佛教徒と耆那と一致する事に關して、疑問の餘地を存して置く。

耆那教の起り來りし時代に就きては、上に述べたるが如く、確然たらずと雖、其が

佛教以前の、宗教的思想の階級に屬するは、略疑ふ可らざるものて有る。而も此は、史上の證明より來るものにして、耆那と尼乾陀子との同一及其禁慾的修行の性質等の吟味に依り、稍其間の消息を知り得べきて有らう。抑も、彼徒の禁慾主義、及び動物の生命に對する極端なる一視同仁觀は、全く彼吠陀の宗教に、痛く反抗したる精神の結果なるは明かて有る。但し、佛陀が、中道の法を取りしは、前已に一言した る所なるが、佛陀は不親切慘酷なる慾望を、抑壓せざる人類を純化し能はざる事を說きて、動物の殺害を禁止したれども、何故か其肉を食するを、末徒に認許して居る點も有る。此所に於いて、予は、佛教が耆那に後れて起りし事を、決定するの案を下すものて有る。斯くて、大體に於て、耆那の信仰は、釋尊以前の商人階級の間に成立した。從ひて佛教が新信仰を皷吹せし時、其門徒として、如何なる階級をも該羅して救濟せしと云ふ大袈裟なる事實は、全く不可能にて在りし事、恰も一を擧げて十を制せむとするの類て有る。卽ち刹帝利は、印度古代より、婆羅門の手中に在り。尼乾陀の比較的平和なる宗教は、商人の信仰を吸收したり。釋尊に至りては、如上の二面を合せ占めむとして、諸弟子を集合したりしが、尙其中心と成りし靈力は、殿堂伽藍僧庵を組織し、此所に一大團を、具體的に完成せむとの企圖に在りたる事、今新に喋々を要しない。

若し其れ、耆那教の信仰が、以前の尼乾陀的佛教徒の其れと同一ならずとせば、其は、佛教に後れて成立せしものと云はねばならぬ。予は、最後に、耆那なる名稱の宗教が、基督紀元以前に存在せし事は、如何にするも、終に證明し能はざる事を一言し置く。但し其以前は、尼乾陀の宗教と云ひ得る。

第二章　耆那教の性質

耆那教は佛教の如く、吠陀の權威を拒み、婆羅門の精神的無上最勝の統一者を、全く否定した、されど、此は實際上の目的よりも、理論としてに過ぎざるやうて有る。若し、實際の方面より見れば、彼等は婆羅門教書中に說明せられし、純粹の儀式を、多く採用し、其祭典の執行、及び列祖に對する献供的崇拜の時に當りても、婆羅門僧侶を使用するは、今尙事實て有る。彼等は、一般僧侶としての婆羅門よりも、修行者としてのモンクを尊重する。蓋し修行者は、高等全階級より採用す可きものにして、其

職掌とする所は、殿堂内に住し、一定の時、一定の場所に於て集合せし一般來訪者の前に、其神聖なる經典を轉讀し、又時として、同朋宗教家の前に於いて、說教及び講演を成す等の事を行ふ。併し、彼等が列祖の崇拜と共に、家庭に於ける儀式の實行中、決して宗教的動行を爲さゞるは、頗る奇なる事實と云て可い。中流階級の苦行者は、ホロスコープを散じ、其集合者に古星學の注意などを與へる。但し、高等階級の修行者は、此事を爲さぬ。

耆那教は、別れて二派と成る。一はデガムバラ(Digambara)にして、他の一派はスヱタンバラ(Swetambara)と稱する。抑も、Digambara なる語は、Akyelad 卽ち裸體を意味す。卽彼徒の或者は、市中を裸體の儘にて往來し、其拜する偶像は、全く衣服なぞを着せざるを以て、デガムバラ耆那と稱せらるるに至つた。スヱタンバラは、其僧徒が白色の外衣を纏ふを以て、然呼ばる。而して此派の僧侶は、手に鐵鉢を携ふるを以て常とする。然るに、裸體派の苦行者は、此れを携へず、食を受る時は、其掌を以てする。白衣派は、蠅の口、鼻に入る事を防ぐ爲に、刷毛及手巾等を携ふる、此れ甚だ奇て有る。

ヲサツワリは、總て白衣派の耆那教徒なり。南印度に於ける、ゼーブール、ベハール等は、裸體派の教徒が頗る多い。但し、アガーワルの大多數に至りては、毘濕奴を崇拜するもの多い。併し、吾人の此所に注意す可きは、耆那教の信仰を告白する多くは、概ね裸體派なる事此れて有る。而して此印度に在りては、商人階級バニヤの外、耆那教信者殆ど無しと云ふも不可無く、南印度に至りては、高下の階級を通じて、此教徒たる者決して少なく無い。又バンジャブには、耆那と呼ばれ、バブラと稱する一階級が有る。

如何なる階級の人と雖、耆那の苦行者たる事が出來る、されど彼等は結婚を許されぬ。僧侶は、戶前に食を乞ひ調理せられたる一匙の食を得て滿足せねばならぬ、而して決して金錢の施與を受けざる事は、又甚だ奇て有る。彼等は、一定の僧院を有せず、從ひて其教徒の建設せし、ダルマサラ卽ち無賃客舍に住するを常とするが故に、施與は他に乞ひ、決して其所有主を煩すが如き事無し。其外出及び旅行に際しては、常に規定に順じ徒步を以てし、決してバルキ、車馬等に乘るを許されぬ。又彼等は、曾て多くの Gachas 卽ち同寮に分轄せられたるが、其大多數は、遠き昔しに已に消滅した。されど、今日僅かに殘れる者を擧ぐれば、

(一)カルタール、ガチャ(Kharlar Gacha)
(二)タパ、ガチャ　(Tapa Gacha)
(三)カマラ、ガチャ　(Kamala Gacha)
(四)ロンカ、ガチャ　(Lonka Gacha)
(五)パチャニ、ガチャ　(Pachani Gacha)

以上の各ガチャは、勿論區別したる同寮團なりと雖、其差異は、決して宗教其者の相異を意味するものて無い。併し、異れる教義の上に立脚せる裸體派、及び白衣派の間に存する小分派は、元より無い事は無い。今、其重なる裸體派分派を擧ぐれば、次の如くて有る。

(一)ムラサンギ(Mula Sangi)……此派は、孔雀の羽毛にて作れる刷子を使用し、赤色の法衣を着け、手を以て施物を受くる。

(二)カシユタ、サンギ(Kashta Sangi)……此派は、木像を崇拜し、氂牛(Yak)の尾の刷子、即ち拂子を使用する。

(三)テラ、パンシス(Te Tera panthis)…此派は、偶像を崇拜せぬ。僧院及び苦行者等が

無い。其長老職は、神聖なる經典を讀誦し、青年後進者の爲に、信仰の指導者として勤むる。

(四)ビス、パンシス(Bis panthis)…此派は、偶像を崇拜す、併し此れに向つて供物を献ずるは、各自の隨意て有る。

次ぎに、白衣派に屬する小分派を擧ぐれば、次の如くて有る。

(一)ラムパカ(Lampaka)……此派は、紀元十六世紀の開創にかかるものにして、偶像崇拜を否定する。

(二)バイス、タラ(Bais tala)……此派は、ラグナートと稱する一教師に依りて、開かれたものてある。

(三)テラ、パンシ(Tera panthi)……此派は、ビガンナートと稱する一教師に依りて、開創せられたるものにして、又ビガンパンチとも稱する。偶像を排斥し、外出の時は口を被ふ習ひを有する。

(四)ヅーンデアス(Dhoondias)……此派は、常に彼等の口を被ひ、其道德の命令に一致せむと努むるが如くに見ゆ。偶像を崇拜せず。又ヅーンデスと稱する、尼僧の

存在を認むる。

耆那教に屬する一般の徒は、スラワクス(Sravaks)と稱す、スラワクスなる語は、正に聽者を意味し、苦行者の爲す說教誦頌等を、聽く可き義務を有するに依りて、然云ふものて有る。耆那の行ふ日々の祈禱は、頗る簡單て有る。而して苦行者は、全く何等の檢束無く、スラワクスは、唯殿堂に詣てゝ、偶像の周圍を三度巡轉し、供物を献じて禮拜し、次の如き經文を唱ふるものて有る。

Namo Arhatanam ; Namo Siddhanam ; Namo Aryanam ; Namo Upadhyanam ;
Namo Loe Sabba Sahunam.

『今阿羅漢に歸命し、宗教的生活の最高對象に達せし諸聖人に歸命し、總ての賢者に歸命し、諸々の教師と世界に於ける全き敬虔とに禮拜し歸命し奉る』

耆那教徒のスラワク等は、自己の宗教を表章するために、木製の首飾り及び神聖なる絲を著けざる點に於いて、已に他の印度教諸派と異つて居る。又印度教徒の如く、其前額を色もて畫かず。而して彼徒の祭典は、最後の二祖の誕生及死去の日を紀念して、擧行するものなるが、又印度教祭典中の或ものをも採用す、即ち次の如し。

(一)シユリイ、パンチャミ(Sri panchami)……此祭典は、マーグ(Magh)の月に於ける、智識の女神を崇拜するもので有る、但し一日より二日にかけて行ふ。

(二)ワサンタ、ヤトラ(Vasanta yatra)…此祭典は、ホリーと稱する、一般春季の祭典て有る。

(三)アクサヤ、トリチャ(Aksaya tritiya)……此は、サトヤユガの始まる日を紀念する祭典て有る。予は、最後に耆那教徒の、重なる順禮靈場を擧げむ。

(一)ギルナール……グジャラト地方。

(二)アブ……ラジプタナ地方。

(三)ベナレス……バレスワナートの誕生地。

(四)バレシユナート……バレスワナートの大悟せし、ベンゴールのハザリバツグ地方に於ける小丘。

(五)カンダルグラマ……マハービラの誕生地、東印度鐵道のラクスミサライ驛附近に在る。

(六)パパプリ……マハービラ死去の地にして、王舍城の附近に在る。

印度宗教實見記（完）

大正四年七月廿五日印刷
大正四年八月十二日發行

△正價金壹圓貳拾錢▽

編纂兼發行者　東京市深川區御船藏前町卅四番地　大日本佛教會編纂局
代表者　久内大賢

印刷人　東京市深川區御船藏前町卅四番地　小松田勇山

印刷所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　國光印刷株式會社

發行所　東京市深川區御船藏前町卅四番地　一喝社
電話本所二一〇九振替東京三三五

不許複製

■佛教界の唯一無比の佛教界■

毎月一回 十五日發行

佛教界

■本誌の内容を示さんか■

十方講壇の良師友

四方開放の活文壇

▲本領には現代の佛教界並に活社會に最も適切なる大論文を掲げて侃々の說と諤々の辭を披瀝し▲講話には高遠なる教理と卑近なる比喩と有益なる逸話とを以て成れる老大家及び青年氣鋭の士が大主張を掲げて一面文書布教を試み他面其儘教壇の資料に用ひ得べからしめ▲研究には篤學の士が心血を注げる古今未發の問題を公表し且つ東西の學理と比較し又は多趣多樣の問題に痛快なる解決をなす。▲教材には家庭たると社會たると團體たると都會たると地方たるとを問はず苟も是に向つて講演し傳道し布教せんとする者の爲に材料を提供し▲月旦には甲乙是非の評論を試みて廣く教界内の諸大家並に現代の人物を批評し其他▲思潮あり▲史傳あり▲雜纂あり更に▲文藝あり、俳句あり、新體詩あり、小說あり。小品文あり、漢詩あり、和歌あり、俳小說ありて趣味津々たり、殊に小品と詩歌俳の四種には大懸賞募集を行ひて佛教文藝を奬勵し▲時報には佛教界内に起れる大小の事件を正確に報導し此の一欄を披けば佛教界の一事一物は恰もパノラマ館中に座して四顧するが如きの觀あらしむ▲誌代は一部金拾錢送料一錢、半ヶ年分金六十錢、送料六錢、一ヶ年分金壹圓廿錢(送料不要)となす。

東京深川御船藏前町第一五二二三番 振替口座用込拂番號 東京第一五二二三番

大日本佛教會本部

東京深川御船藏前町 電話本所二一〇九番

機鋒峻嚴・趣味横溢

誰でも宇宙の眞理を悟ることが出來る——頗る奇!!

誰でも處世の祕訣を得ることが出來る——頗る妙!!

顧問 日置默山

顧問 新井石禪

禪

月刊雜誌

木人方歌石女起舞

▼壹部金拾貳錢郵税壹錢▲

▲一年郵税共壹圓四拾錢▼

▼振替口座東京參參五番▲

看よ! 本誌は複雜なる社會の羅針盤なり……

讀め! 本誌は混沌たる現代の救濟藥なり……

購讀申込所

一喝社

東京市深川區御船藏前町廿四番地

曹洞宗大學長秋野孝道老師著（一名禪學眞髓講話）

曹洞宗意講話

製本頗る優美
總ふり假名附
正價壹圓廿錢
送料十二錢

參禪　明辨　道瞭
明瞭　瞭

生を明め死を明むるは佛家一大事因緣なりと是の一句作麼生か會せん禪は佛法の總府にして曹洞の宗意は禪の眞髓たり著者秋野孝道老師は機鋒峻烈なりと雖も接得の妙用平易懇篤を極む現に曹洞宗大學長として令名嘖々たり然かも競爭激烈の今日最も緊要なるは膽力の養成にあり大死一番來の端的を究明するにあり本書は實に此の使命を全うするに餘りあり殊に曹洞宗意問題の解決は同宗僧侶及び檀信徒として焦眉の急務と謂ふべし乞ふ憂國憂宗の志士は速かに一本を机下に供られよ

發行所　東京市深川區御船藏前町三十四番地　電話本所二一〇九番　振替東三三五番　一喝社

324
460

終